

ピエール・パスカル
『ロシア民衆の宗教』
翻訳の試み(5)

鈴木 淳 一

Pierre Pascal
《La Religion du Peuple Russe》

translated by J. Suzuki

これは「文化と言語」第55号(2001年10月31日)、第57号(2002年10月31日)、第58号(2003年10月31日)、第60号(2004年3月30日)に掲載したピエール・パスカル著『ロシア民衆の宗教』翻訳の続きである。今回取り上げるのは、前4回に引き続く第2部——第2部は「序」、「『神の母の苦悩巡礼』翻訳」、「注釈」から成っている——である。

今回も前回同様、原注は「1、2、3…」と番号をふって脚注の形で示し、訳注は「(1)、(2)、(3)…」として章末にまとめて載せることにしたい。ただし、ごくまれにだが、訳注を便宜上 [] に入れた形で、本文あるいは脚注に直接組み込むこともある。

第2部

神の母 [=生神女=聖母] の苦悩巡礼⁽¹⁾

第1章 序

ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』の中で、「その場面場面や大胆さではダンテに勝るとも劣らない」、とはいえ「もちろんギリシャから伝えられた修道院の小詩」をイワンの口にのぼらせている。これが『神の母 [=生神女=聖母] の苦悩巡礼』である。

イワンのレジュメは過不足ない素晴らしいもので、原作への格好の入門書となっている。

「生神女 [=神の母=聖母] が地獄を訪れ、大天使ミカエルに案内されて『諸々の苦悩』を経巡ってゆく。生神女は様々な罪人とその苦悩を目にするのだが、そんな中に火の海へ落とされたとくに興味深い種類の罪人たちがいるのだ。彼らの中にはこの火の海の中に沈みかけていて、もはや二度と浮上できなさそうな連中もいる。つまり『神は彼らをお忘れになろうとしている』¹というわけだ。何とも深みのある力強い表現じゃないか。そこでショックを受けて涙に暮れる生神女は、神の玉座の前に身を投げ出すと、地獄の住民みんなに、彼女が地獄で目にした罪人全員に、分け隔てなく慈悲を施してくださるようにと頼む。この生神女と神のやりとりは途轍もなく興味をそそるものだ。彼女は懇願し、立ち去ろうとしない。そして神が彼女の息子の釘づけにされた手足を指し示し、どうして私にお前の息子を苦しめた人々を許すことなどできようか

¹ ドストエフスキーの引用（「神は彼らをお忘れになろうとしている」）は不正確である。原作は「いったんこの闇に閉じ込められてしまえば、神はもはやその者のことなど思い出しはしないでしょう」となっている。第2章「翻訳」の段落17参照。

と問いかけると、彼女はあらゆる聖人、あらゆる殉教者、あらゆる天使と大天使とに、一緒に神の前に平伏し、地獄の住人すべてに対する分け隔てない慈悲の施しを祈るよう命じるのだ。こうして生神女はついに神を拝み倒すことに成功し、毎年受難週間の金曜日から聖三位一体祭の日までは地獄の苦悩が中断されることになるのだが、地獄の罪人たちはすぐさま神に感謝し、神に向かって『主よ、このような裁きをくだされたあなたは正しい』と叫んだのだ²。

イワンが「小詩」を引用するのは、心中でずっと温めてきた、やがては有名な「大審問官伝説」となるはずの自作物語詩を正当化したいからである。上述のレジュメでは、「とくに興味深い種類」とか「途轍もない興味」といった物言いに看取されるように、イワンという人物像にはある種嘲笑的な調子が付与されている。とはいえドストエフスキーが『神の母の苦悩巡礼』の本来的な意義に深く心を動かされていたことは明白である。もしもこの物語がギリシャからロシアへもたらされ、ロシアで長きにわたって成功を収めてきたとすれば、それはこの物語がロシア民衆の何らかの宗教的直感を満足させたということに他ならないからである。レジュメがこのかなり詳細に書き込まれた物語から掬いあげたいいくつかの要点は、この宗教的直感が作家にとってどのようなものであったかを明らかにしてくれている。

この宗教的直感というものの内実の第一は、ある日あらゆる罪人が「分け隔てなく」許されてほしいという願望である。もしも神の正義が罪人たちの苦悩の全面解除とは対立するとしても、少なくとも復活大祭という喜ばしき時間の間だけは苦悩が停止してほしいという希求である。

そしてその第二は、祈り一般の効力、そして何よりも生神女のとりなしの効

² 『カラマーゾフの兄弟』第5編5章「大審問官」冒頭（引用はガルニエ版346頁によったが、若干修正を加えてある）[訳者はロシア語テキスト（アカデミー版30巻全集第14巻225頁）から直接翻訳した。ところでドストエフスキーは地獄の苦悩が中断されるのは「受難週間の金曜日から聖三位一体祭の日まで」としているが、正しくは「受難週間の木曜日から聖三位一体祭の日まで」である（第2章「翻訳」の段落20参照）。なお「受難週間」とは「復活大祭」直前の一週間のことであり、「聖三位一体祭」は「復活大祭」後50日目の日曜日にあたる]。

力は絶大なものだという事である。

* * * * *

『神の母 [=生神女=聖母] の苦惱巡礼』はアポクリファ (=外典偽典) である。つまりこれは、キリスト教の初期数世紀の間に、正典から読み取れる内容が好奇心のごく一部しか満たせないものだったことから、聖史の余白で創作されていった数多くの物語の一つなのである。そうした物語が生まれ、増殖したのはとりわけ近東諸国^{オリエント}においてであり、そうした物語においては民衆の想像力が思う存分に発揮されたのだった。ユダヤ人たちはすでに、アブラハムやモーセ、イザヤ、ソロモンといった人物についての潤色した物語を創作していた。キリスト教徒は使徒たちの物語すらも潤色し、『ペテロ行伝』や『トマス行伝』等々が生み出された。『ペテロ福音書』や『トマス福音書』等々もあった。アポクリファとはユダヤ・キリスト教世界にあまねく伝播した広大な文学だったのである。

アポクリファにはあらゆる要素が内包されていた。そこには多くの小説的要素、信仰に相応しい何か伝統らしきもの、信者たちによって提起された疑問に対する素朴な回答、そこかしこに出現する諸々の教義の残響などが含まれていた。アポクリファの形式もまたその内容に見合うように、読者あるいは聞き手を魅了するだけのものを備えていた。そこには意外性や異国情緒に満ちた叙述、生き活きとした対話、聖人たちの冒険と偉業 [苦行] が備わっており、しかもそれらはすべて装飾的であると同時に具体的な文体によって描写されていたのである。

アポクリファで扱われる主題は大抵ただ一つ、それは終わりの終わりということであった。つまり主題は最後の審判における神の啓示、いわゆる「アポカリプス (黙示録)」であり、魂の試練、至福者の住処、地獄に落ちた人々の苦惱、この世の終わり、それにキリストの再臨ということであった。ユダヤ教によって生み出されたこの終末論的ジャンルは、新約聖書の正典『ヨハネ黙示録』において具現化されている。このジャンルはユダヤ・キリスト教時代に、

たとえば『イザヤの^{ヴァイジョン}幻視』、『ペテロ黙示録』などの登場とともに隆盛を極めた。このジャンルが再び隆盛を極めるのはビザンティン時代のことで、そのときには『パウロ黙示録』を始め、『神の母の黙示録』、正確には『神の母の苦悩巡礼』などといったテキストが作り出されたのであった。

『イザヤの^{ヴァイジョン}幻視』は『イザヤの昇天』という合成文書の最終章にあたり、作成年代は1世紀末にまで遡る。そこでは預言者イザヤは天使に導かれ、天の軍団の合唱をバックに地上から第7の天までを巡る。彼が問いかけ、天使が答える形になっているが、そこで話題となるのは至福者の世界、すなわち天使や旧約聖書の義人たち、それに神自身の世界のことだけである。不信心者たちについては一言も触れられていない³。

2世紀中葉に成立したとされる『ペテロ黙示録』はもっと複雑である。ここではキリストがペテロに、まずは世界の終わりに罪人たちへ降りかかる苦難の数々を、次に天上の神秘の数々を啓示する。その啓示によれば、不信心者たちは漆黒の闇に取り囲まれ、絶えることのない業火に焼き尽くされる。終わりなき責め苦が、姦通者、迫害者、高利貸、偶像崇拜者等々といった地獄の様々な範疇の人々に襲いかかる。地獄に落ちた人々は獣に引き渡され、蛆虫に噛まれ、悪魔に責め立てられるが、彼らはそうした罰も当然の報いだと知ることになる。ペテロがこの啓示に長々と涙を流し、キリストに対し罪人たちへ憐れみをかけてくださるようにと懇願すると、キリストは罪人たちのことを父なる神にとりなしてやろうと約束する。しかしキリストは生者たちが己の罪をさらに重ねるのではないかと心配して、ペテロに生者たちには約束のことを伝えないよう命ずるのである。

結末は曖昧模糊としている。それでもどうやら許しは与えられるように見える。キリストはこう言うからである——「私は、私を信じた人々がいるがゆえに、人類に憐れみをかけよう」と。このキリストの約束をペテロは弟子のクレ

³ このアポクリファについては、エミール・テュルダニユ Emile Turdeanu 『イザヤの^{ヴァイジョン}幻視。正教の伝統と異端の伝統 La Vision d'Isaïe, Tradition orthodoxe et tradition hérétique』(テッサロニケ、1968年)を参照のこと。

メントに、彼が受けた啓示のすべてとともに伝える。そして、「罪人たちに悔い改めさせるために、炎熱による懲罰を利用して彼らを脅し」続けることだけを命じる。こうして『ペテロ黙示録』のテキストは終わるのだが、そこではキリストの許しが与えられており、地獄の永遠の苦しみは不詳の作者の憐憫によってたんなる巧妙な教育要領へと変形させられている。

『パウロ黙示録』は4世紀末の作品とされている。現在我々がその作品を知っているのは、15～17世紀のものとされる多数のスラヴ語写本、あるいは8世紀のラテン語写本を通じてである。このラテン語写本はもちろんもっと古いギリシャ語テキストからの翻訳であるが、当のギリシャ語テキストは現存しない。こうした事実は、このアポクリファが何世紀にもわたって西欧のみならず、近東諸国^{オリエント}においても実に幅広く流布されたことを裏づけてくれる。

『パウロ黙示録』もまた一種の「^{ヴィジョン}幻視」ものである。ある天使が使徒パウロに向かってこう言う——「私です。私はあなたに義人たちがその死後に連れてゆかれる場所をお見せしよう。それからあなたを奈落の底へと案内し、罪人たちの魂と彼らが死後に連れてゆかれる場所をお見せしよう」。パウロは義人の魂と罪人の魂が裁かれる場に立ち会う。それから彼は第3の天へと導かれ、そこでエノクとエリアに迎えられる。パウロは、至福者たちをその功德ゆえに受け入れる天国の様々な町々を経巡り、やがてダビデ王が永遠のハレルヤを歌う天上のエルサレムへと至りつくのである。

パウロと天使の間では絶えず対話が交わされる。二人は揃って西の方へと歩を進める——「そして私は燃え盛る火の大河を見ました。数え切れないぐらいの男と女がその河へ入っていきました。膝まで河に浸かっている者もいれば、臍まで浸かっている者、唇まで浸かっている者、髪の毛まで浸かっている者もいました」。他の場所では底なしの深淵が、神に絶望した人々を飲み込んでいる。ある老人がタルタロスの天使たちの牙に刺し貫かれた腸を手に行っているが、彼は司祭にあるまじき司祭なのである。また司教が石を投げつけられているが——あるいは、ある異本によれば、火の舌に舐められているが——、それは彼が寡婦や孤児に憐れみをかけなかったからである。また不義密通した読経

僧は切り刻まれた唇と舌を持っている。こうした悲惨な描写はまた、『ペテロ黙示録』が斟酌しなかった不道德な教会人についてもなされている。そして高利貸たちは蛆虫に食われている…他にも様々な拷問が描かれており、それらはあらゆる種類の罪を網羅している。パウロは毎回「彼らは何者なのか？」と尋ね、そのたびに天使が答えている。パウロが涙を流し、「彼らはどうして生まれてきたのですか？」と訊くと、天使は「あなたは涙を流しているが、もっとずっとむごい拷問の数々をまだ見てはいないのです」と言う。かくして悪臭を放つ井戸が登場するが、そこでは「キリストは降臨して受肉し…パンと聖杯とは」キリストの肉体と血であると「表明したことの無い」人々が、果てしない火炙りに処されている。続いて万年氷の世界が描かれ、そこでは「キリストは復活しなかった…と広言する人々」が齒軋りをしているのである。

こうしてとうとう多種多様な苦悩のただ中から、「主なる神よ、我らを憐れみ給え」という叫び声があがる。そのとき開かれた天から大天使ミカエルが天使の軍団を従えて降りてきて、罪人たちにこう教え諭す——「私は人類のために日夜絶え間なく祈りを捧げている…だがお前たちの祈りはどこにあるのだ？ お前たちの悔悟はどこにあるのだ？ …だから今は泣くがいい。私もお前たちとともに泣こう…そうすればきっと慈悲深き神はお前たちを憐れまれ、お前たちに安らぎをお与えくださるであろう」。かくて全罪人は言うに及ばず、ミカエルもパウロも神に懇願するのである。

そのとき神の子キリストが天から降臨し、こう告げる——「私の血はお前たちのために流されたのだ…お前たちのために私は茨の冠を被ったのだ…一方お前たちは悔い改めていない…しかしながらミカエルと…我が最愛のパウロに免じて…お前たちの同胞と…私の言いつけを守っているお前たちの息子たちに免じて、そしてさらにまた私自身の寛大さの名において、私はお前たちにこれからずっと…私が復活する日の一昼夜を休息として与えよう」。罪人たちは感謝するが、拷問する天使たちは彼らにこう注意を促す——「お前たちは許しを得たわけではない…ただ一昼夜の休息という恩恵に与っただけなのだ」。

最終的にパウロは聖母マリアによって天国に迎え入れられ、旧約の族長や預

言者、義人たちに歓迎されることになる。

この物語は、魂が裁かれるプロセスや第7の天までの道程、冥府下降が描かれている点では魅力的であるが、同時にまたデテールにおいては曖昧模糊としてもいる。そこでは苦しむ人々にとっての大いなる仲介者、すなわち神や天使や人間の最愛の人とは、使徒パウロなのである。「神の母、聖母マリア」は最後の最後に、ただパウロを歓迎するために姿を見せるだけである。すなわち431年のエフェソス公会議で採択された定義——マリアは神の母であり、やがて神となるイエス一人だけの母ではないという定義——の後でつけ加えられたに違いない結末部において登場するだけなのである。

『神の母の黙示録』は明らかに『パウロ黙示録』から派生したものである。ただ前者は後者よりも短く、簡潔で、結構がしっかりしている。また前者では地獄に落ちた人々の境涯のみならず、神の母のとりなしの力と栄光も主題となっており、神の母は主要な登場人物となっている。このアポクリファを構想することができたのは、聖母 [= 生神女] 崇拝が最高潮に達し、全盛を誇った時代以外ではありえない。すなわちそれは、地獄の住人たちのために神から恩赦を引き出す存在として、聖母 [= 生神女] 以外には何者も想像しえなかった時代の産物である。その時代とは東ローマ皇帝ユスティニアヌス I 世治世 [518-527] 以前ではない。一方その使用言語から判断すれば、作成時期は8～9世紀にまで下るのではないかと思われる。

このアポクリファのテキストを現代にまで伝えるもっとも古いギリシャ語写本は、12世紀のものである。それはオーストリアのウイーンに保管されている (Vidobon、神学、No.333)。ただ残念なことにこの写本は、冒頭部に欠落があり、不完全な状態で展示されている。とはいえこの写本は、初期の形式をかなり忠実に保持していると考えてもいいだろう。なぜならそれは、他のどのテキストよりも簡潔だからである。

また15、16、17世紀の写本の中に発見されたテキスト群から判断すると、このアポクリファには多様な脚色が加えられ、場面が入れ替えられたり、フレーズが部分的に書き加えられたり、そして何よりも責め苛まれる罪人のカテ

ゴリーが増やされたりしていたことが分かる。使用言語はどんどん刷新されている。また冥府下降は、『パウロ黙示録』の例にならって、神の母の天国訪問によって補完されている⁴。そしてついに1870年、『神の母の黙示録』はこうした近代の異本の一つを底本にしてアテネで印刷されたのだった。それは学術的校訂版と呼べるような代物ではまったくなく、その反対に民衆啓発用の廉価版パンフレットといった体のものだった。この版は天国訪問の場面の後に素朴な道徳的結論を含んでおり、そこでは「いま本『黙示録』を所有し、畏敬を込め、身を震わせながら読む人々に対して」天国が約束されている。この版は1897年に重版されている。こうして我々は、『神の母の黙示録』がギリシャにおいて何世紀もの間脈々と生き続け、現代にまでその息吹を伝えていることを知るのである⁵。

* * * * *

アポクリファは、中でもとくに黙示録は、まずは近東諸国の、続いて^{オリエント}西欧のキリスト教世界にあまねく広まり、それからスラヴ諸国がキリスト教を受容するや否やそうした国々へも伝播されていったのだった。アポクリファはギリシャ語から様々な言語へと翻訳されたが、その結果、中にはオリジナルテキストよりも古典シリア語やエチオピア語、ラテン語、スラヴ語のテキストの方がきちんとした形で現存しているものもある。

一般的に『神の母の苦悩巡礼』の名で知られる『神の母の黙示録』のもっとも古いスラヴ語ヴァージョンは、古文書学者および言語学者によれば、その成

⁴ 大きな図書館ではそれぞれにかなり異同のあるギリシャ語テキストが多数知られていた。そうしたテキストの一つがキオス島で発見されている。

⁵ アポクリファについては膨大な文献がある。最初に手に取るべき入門書としては、F.アミオ F. Amiot 『聖書の外典偽典 La Bible apocryphe』(パリ、ファヤール社、1952年)がよかろう。『ペテロ黙示録』と『パウロ黙示録』については同書の287-331頁で検討されている。またエミール・テュルダニュー Emile Turdeanu は「スラヴ正教国の文学的伝統における聖パウロの^{ヴィジョン}幻視 La vision de saint Paul dans la tradition littéraire des Slaves orthodoxes」について、「スラヴ世界 Die Welt der Slaven」誌、第1巻(1956年)、第4号、401-430頁に注目すべき論文を発表している。

立年代が12、13世紀と想定される羊皮紙に書かれた文集の中に編み込まれたものである。この文集はロシアの聖三位一体セルギエフ大修道院に属するものであるが、その文集の中でアポクリファ『神の母の苦悩巡礼』は、異論の余地なき正統な作品として、聖ヨハネス・クリソストムスや聖バジル、「スラヴ人司教聖クレメント」⁽²⁾、その他の天啓作家たちからの翻訳の間に配置されている。この事実は『神の母の苦悩巡礼』が当時どれほど高く評価されていたかを証するものである。

この写本はその言葉遣いの細部においてロシア的である。『神の母の苦悩巡礼』については他にも膨大な数のロシア語写本が伝えられているが、それらはどれもみなこの写本よりも遅れて作成されたものである。

ブルガリア語、セルビア語、ロシア語、ウクライナ語という具合に少しずつ発見されていったスラヴ語ヴァージョンのほとんどは、14世紀から19世紀にかけて次々に作成されていったものだが、その数の驚くべき多さは、『神の母の苦悩巡礼』が信者たちの想像力をいたく刺激したということ、と同時にまたさぞかし聖職者たちの道德教育の道具として役立ったに違いないということを教えてくれる。このアポクリファはスラヴ地域からルーマニア地域へまでも溢れ出してゆく。最初のルーマニア語訳はスラヴ語テキストを定本として16世紀中葉にトランシルヴァニアで完成され、2番目の翻訳はギリシャ語テキストを定本として17世紀に完成されている。

『神の母の苦悩巡礼』は今日にいたるまで一度として、正教信者たちの注目の的とならないことなどなかったのである。

ロシアの知識人階級がこのアポクリファを見出したのはやっと1857年、文芸批評家であり文学史家であるフィピンが大型月刊誌「祖国雑記」に『ロシア古代文学。アポクリファ。神の母の苦悩巡礼』⁽³⁾と題した論文を発表した時のことである。論文の主題は過不足なく縦横無尽に展開されているのだが、一般的な考察の部分があまりに長く、その結果全25頁中最後の11頁しか『神の母の苦悩巡礼』そのものには割り当てられていない。論文は全編独創性と喚起力に富んでおり、思いがけない新発見だったことを彷彿させる。だがそのとき

フィピンの視野に12世紀のテキストは入っていなかった。彼が利用したのは1602年付けのテキストであり、さらにそれよりももっと新しい時代に属するテキスト群——彼自身はそれらのテキストの年代を特定できないでいたが——であった。彼はギリシャ語で書かれたオリジナルテキストもまた考慮していないが、「その起源がビザンティンであることは疑うべくもない」と言明している⁶。

1862年には1602年付けテキストが——それはトルストイ財団保有の原稿類から引き抜かれたもので、現在ではペテルブルク公立図書館に保管されている(17世紀、No.229、Q 82)——、クウシェリョーフ=ベズボロトコ伯爵によって『古代ロシア文学の記念碑』の第3巻として出版された⁽⁴⁾。このテキストには、ロシア最古と思われる聖三位一体セルギエフ大修道院の写本を底本とした諸々の異本が添えられていた。

それもそのはずで、1857年から1862年の間にスレズネフスキーによって12世紀の写本が発見されたからである⁽⁵⁾。また同じ頃、高名なスラヴ研究者ミクロジッチ Miklositch もまた独自に、ウィーンの手写本の中に12世紀のギリシャ語テキストを発見していた。この二つの新発見に触発されたサンクト・ペテルブルク科学アカデミーは、発見された二つのテキストの公表を決意し、その結果これらのテキストは1863年初頭、「帝室科学アカデミーロシア語・ロシア文学部門紀要 Известия по Отделению русского языка и словесности Академии наук」に掲載されたのであった(第10号、第5分冊、col.551-578)。

以来『神の母の苦悩巡礼』は公有のものとなったのである。ロシアは当時、碩学たちによる聖者伝や旧教徒の著作、歌謡や英雄叙事詩、諺や方言、農民の風俗習慣や言葉遣い等々といった自国の古代文明と民衆的伝統の再発見が盛んであった。1863年の時点ですでに『神の母の苦悩巡礼』の新版が発表されて

⁶ 「祖国雑記 Отечественные записки」、1857年、115号、§1、335-360頁(『神の母の苦悩巡礼』については349-360頁)。

いる。チホヌラーヴォフが校訂したその新版は、『ロシア外典・偽典の古文献』第2巻に掲載された⁷。それは12世紀のテキストであった。

それ以後12世紀のテキストがロシア自体で再版されることはなかったが、ルーマニアではバルブ・ペトゥリチェイク・ハシュデウ B. Petriceicu-Hasdeu がそれを自著『ルーマニア民衆の本 Caltile poporane ale Roumanilor』(第2巻、313-367頁)に、スレズネフスキーのギリシャ語テキストとともに再録している。12世紀のテキストが最後に再版されたのは1906年、リヴォフにおいてのことで、チホヌラーヴォフに依拠して編まれたイワン・フランコの『ウクライナ語写本から採取されたアポクリファと伝説』(第4巻、124-134頁)に掲載されている。

1602年付けのテキストは、1951年以来モスクワで再版に再版を重ねたグウジー編『ロシア古代文学名作選』の底本となっている⁽⁶⁾。またこの選集は、『神の母の苦悩巡礼』についての知見に対するソヴィエト時代唯一の貢献物である。

ロシア語でもその他の言語でも、写本同士の照合は一切なされてこなかった。それが今日まで現存する(あるいはまた、折に触れて雑誌や文集において少なくともその一部が発表された)ギリシャ語の写本であるか、スラヴ語の写本であるかにかかわらず、写本同士が照合されたことなどなかったのである⁸。1863年にスレズネフスキーによって公表されたギリシャ語とロシア語の

⁷ チホヌラーヴォフ Николай Саввич Тихонравов (1832-1893) 『ロシア外典・偽典の古文献 Памятники отреченной русской литературы, собраны и изданы Н. Тихонравовым』 (1863)、第2巻、22-30頁。

⁸ イワン・フランコ Иван Яковлевич Франко (1856-1916) は『ウクライナ語写本から採取されたアポクリファと伝説 Apocryphes et Légendes tirés des manuscrits ukrainiens/ Апокрифы и легенды из украинских рукописей』に、18世紀に書かれた『至聖なる神の母が体験した苦悩の啓示 Révélations des tourments que vit la très Sainte Mère de Dieu』を複数収録しているが、最初の3つがロシア語の『神の母の苦悩巡礼』とは懸け離れた内容であるのに対し、1897年という日付を持つ4番目のものは活字化されたロシア語版テキストの翻訳であるように思われる(前掲書、135-172頁)。12世紀のロシア語テキストを翻訳した、これまた変則的な15世紀のセルビア語ヴァージョンは、1863年にすでにチホヌラーヴォフによって『ロシア外典・偽典の古文献』に発表されている(第2巻、

テキストもまた、それぞれに利用された写本のいかなる照合校訂もなされたわけではなかった。『神の母の苦悩巡礼』の学術校訂版を仕上げるための作業は、すべてこれからのことである。疑わしいパッセージを解明するためのいかなる努力も、これまで一切なされてこなかったのである。

『神の母の苦悩巡礼』を対象とした唯一の包括的な研究は、1904年にキエフで出版されたフロリンスキーТимофей Дмитриевич Флоринский (1854-1919) 記念論文集のボカドロフ Н. Бокадоров の論文である (39-94 頁)。だがこの論文は、その扱う領域がギリシャ、南スラヴ、ロシアの文学から民間伝承までとあまりに広く、皮相的なものになってしまっている。また「スラヴ世界 Die Welt der Slaven」第6号 (1961年) 26-39 頁には、ルドルフ・ミューラー Ludolf Müller のあまりに短いが興味深い神学的、かつ文学的な注釈が掲載されている。

モンタギュー・ローズ・ジェイムズ Montagu Rhodes James が自著『新約外典偽典 Apocryphal New Testament』(オクスフォード、1953年) に発表した英語訳は、ギリシャ語テキストに依拠したものである。また『古代ロシア語読本 Altrussisches Lesebuch』(1949年、26-38 頁) に掲載されたトラウトマン R. Trautmann の翻訳は不完全なものである。

つまるところ『神の母の黙示録』あるいは『神の母の苦悩巡礼』は、何世紀にもわたって様々な国の信徒たちに愛されてもきたし、また読者はそこにきっと諸々の純文学的美しさを目の当たりにすると思われるにもかかわらず、これまで碩学たちによって然るべき取り扱いを受けたことなどなかったのである。

とはいえここではただ、もっとも古いギリシャ語ヴァージョンのもっとも新しいスラヴ語訳のテキスト2種類、すなわち12世紀の聖三位一体セルギエフ大修道院の写本と1602年の写本とを底本としたフランス語ヴァージョンを提示するにとどめよう。12世紀のギリシャ語テキストには、スラヴ語テキスト

30-39 頁)。16世紀に作成されたトランシルヴァニアのヴァージョンは、バルブ・ペトゥリチェイク・ハシュデウ B. Petriceicu-Hasdeu によって発表されている (前掲書)。

では省かれたものの、物語をより分かりやすくしてくれるフレーズがいくつか含まれているが、それらはここに提示する翻訳において紹介されることになる。また下線部はその反対に、スラヴ語テキストにおける付加箇所を示すこととする。

第2部第1章「序」 訳注

- (1) 「生神女の苦悩巡礼」にあたるロシア語は《Хождение Богородицы по мукам》である。直訳的観点からすれば「聖母（処女）マリア」はフランス語では la Vierge Marie、ロシア語では Дева Мария となり、「神の母」はフランス語では la Mere de Dieu、ロシア語では Богородица (Богоматерь) となる。また日本正教会ではマリアを「聖母」ではなく、「(至聖) 生神女」と呼んでいる。

ちなみに、たんに《хождение по мукам》と言えば、「艱難辛苦の人生行路」という意味である。人間の魂は死後 40 日間にわたって様々な苦悩に出会うというキリスト教信仰に由来している。これはまた、ソヴィエト文学の古典とされ、かつて日本でもよく読まれたアレクセイ・トルストイの代表作の題名でもある（1921 年から 20 年かけて完成されたこの名作の邦題は『苦悩の中を行く』となっている）。

ところで内村剛介氏は『人類の知的遺産 51 ドストエフスキー』（講談社、1978 年）で、「米川訳の『聖母の苦患遍歴』はかなしい誤訳である。『苦患』の複数は場所としての『地獄』だし、『場所』だからこそ聖母はそこを『遍歴』できるのである。これはまこと見易いこと。その見易いことを見落とすところが思想音痴の思想音痴たる『かなしさ』である」（33 頁）と述べている。思想音痴とどう関わるのかは定かでないが、確かに「地獄遍歴」とか「地獄巡礼」、「地獄巡り」とする方が語感としてはよさそうな気がする。それでもなお、聖母（= 生神女 = 神の母）が様々な苦悩を次から次へと見て回るといった内容から判断して、内村氏の批判にもかかわらず、「恋愛遍歴」などという表現が日常化していることでもあるし、ここでは言語により忠実に「苦悩巡礼」と訳しておくこととする。

- (2) 聖ヨハネス・クリソストムス (Иоанн Златоуст, 347-407) は、コンスタンチノーブルの大主教にして教父。クリソストムスとは「金の口」の意だが、その説教の上手さから死後に与えられたもの。彼の著作はキリスト教思想の頂点を示すものとされ、正教会では最大の敬意を集めている。

聖バジル (Василий Великий Кесарийский, 330-379?) は、カッパドキアはカイセリの大主教にして教父。キリスト教徒のみならず、あらゆる人々から敬愛され、多くの著作

を残した。

聖クレメント (Климент Охридский, 840-916?) は、マケドニアの都市オフリドの司教で、古代ブルガリア文学の始祖の一人。キリル文字を作ったキリルとメトディウスの盟友として、またスラヴ始めての大学の創設者として知られる。

- (3) プィピン (Александр Николаевич Пыпин, 1833-1904) はロシアの文学史家。リベラルな啓蒙思想の持主で、民話や文学、社会思想に関する論文を多数雑誌に発表した。主著は『ロシア文学史 История русской литературы. Т. 1-4.』(1911-13)。ここで言及されている論文の原題は、Древняя русская литература. I. Старинные апокрифы. II. Сказание о хождении Богородицы по мукам。
- (4) クウシェリョーフ=ベズボロトコ伯爵 граф Кушелёв-Безбородко によって出版された『古代ロシア文学の記念碑』の原題は、Памятники старинной русской литературы, издаваемые Гр. Кушелевым-Безбородко, редактируемые Н.Костмаровым. Вып.3. (СПб. 1862.)。伯爵はまたリベラルな文学月刊誌「ロシアの言葉 Русское слово」(1859-66)を創刊したことでも知られる。
- (5) スレズネフスキー (Измаил Иванович Срезневский, 1812-80) は、ロシアの言語学者。スラヴ諸国の古文書を収集し、大学で言語史を講じた。比較言語史の草分けとしても、チホヌラーヴォフ、プィピン、それにチエルヌィシェフスキー、ドブロリユーボフの師としても知られる。主著は死後に刊行された『古文書に基づく古代ロシア語辞典のための資料 Материалы для словаря древнерусского языка по письменным памятникам』(1893-1912)。スレズネフスキーは発見した『神の母の苦惱巡礼』のテキストを自著『ロシア文字とロシア語の古文献 (10~14世紀) Древние памятники русского письма и языка (10-14 веков)』(1863)にも発表している。
- (6) グウジー (Николай Каллиникович Гудзий, 1877-?) はロシアおよびウクライナの文学史家で、古代ロシア文学と18世紀から20世紀初頭にかけてのロシアおよびウクライナ文学を研究するとともに、テキスト校訂学や文献学史の諸問題についても多くの著作を残した。レフ・トルストイの、とくにその原稿の研究でも有名。また『イーゴリ遠征譚』のテキストの真偽を巡ってフランスのスラヴィスト、A.マゾンと論争したことでも知られている。『ロシア古代文学名作選』はより正確には『11-17世紀ロシア古代文学名作選 Хрестоматия по древней русской литературе 11-17 вв.』。

第2章 翻 訳

大斎第5週目の水曜日のための、大いに教訓に富んだ、地獄の責苦とその中斷¹にまつわる至聖なる神の母の伝説²。父なる神よ、感謝します！

〈01〉 聖なる神の母はオリーブ山で³ 我らが主なる神に、「父と子と聖霊の名において大天使ミカエル⁴が地上に降り立ちますように」と祈ろうとしました。

すると大天使ミカエルが天から降りてきました。四百の天使が一緒でしたが、そのうちの百は東の方から、百は西の方から、百は南の方から、百は北の方からやってきたのでした。ミカエルは天使たちと一緒に慈悲深い神の母⁵に近づいて会釈すると、こう言いました——「御機嫌うるわしゅう、父の反照

¹ ギリシャ語テキストでは「悔悛 pénitence」、ロシア語テキストでは「休息 repos」となっている。ここでは「中斷 pause」と改変してあるが、それは、ここで問題となりうるのは、苦悩の「中斷」ということだけだからである。

² 「伝説 légende/легенда」は、語源的な意味では、伝記あるいは年代記以外のすべての著作、すなわち説教、物語、詩、条約等々を指す語「слово」の訳語である。ただしここでの「伝説」は、修道院の「宗教講話」の代替語として使用されている。ドストエフスキーが『神の母の苦悩巡礼』を「修道院の小詩 монастырская поэмка」と呼ぶのはそのためである。『パウロの黙示録』もまた修道院の「宗教講話」であった。『パウロの黙示録』は大斎第5週目の木曜日に、『神の母の苦悩巡礼』は同じ週の水曜日に講話されたのである。

³ 「マタイ伝」24章3節によれば、キリストがエルサレム崩壊と終末の予兆について語るのは他ならぬオリーブ山上においてである。オリーブ山は多くの新約アポクリファにおいて物語進行の出発点となっている（たとえば『神の母の夢』）。

⁴ 大天使ミカエルは、旧約においても新約においても、神の民の守護者であり、また西方教会はもちろん東方教会においてもキリスト教徒の魂の守護者である（死者のミサにおける奉獻式ではこう歌われる——「徴をもたらず聖ミカエルが彼ら [死者たち] を聖なる光の下に顕してくれますように signifer sanctus Michaël repaesentet eas in lucem sanctam」）。ミカエルはアポクリファにおいて大きな役割を担っている（たとえば『イザヤの幻視』）。

⁵ ここでは「祝別された、聖なる Bénite」という語は、単独で用いられる場合は、ロシア語の形容詞「天恵の благодатная」の訳語である。[ここでは「慈悲深い」という訳語をあて、たとえ単独で出てきても「慈悲深い神の母」と訳すことにする]

よ！ 御機嫌うるわしゅう、子の住処よ！ 御機嫌うるわしゅう、聖霊の従者よ！ 御機嫌うるわしゅう、ケルビムたちの誉れよ！ 御機嫌うるわしゅう、7つの天を支える人よ⁶！ 御機嫌うるわしゅう、ダヴィデに宣託された人よ！ 御機嫌うるわしゅう、天使たちの崇拜の的よ！ 御機嫌うるわしゅう、預言者たちの福音の的よ！ 御機嫌うるわしゅう、誰よりも高く神の玉座の前に立つ人よ！」。

すると慈悲深い神の母は大天使ミカエルに答えました——「あなたも御機嫌よう、司令官よ！ 御機嫌よう、ミカエルよ、軍団の長よ、聖霊の従者よ！ 御機嫌よう、司令官よ、セラフィム軍団の誉れよ！ 御機嫌よう、迫害者を打ち負かし、主の玉座の前に堂々と立つ司令官ミカエルよ！ 御機嫌よう、ミカエルよ、決して絶えることのない光の輝きよ！ 御機嫌よう、司令官よ、宇宙の始原よりラッパを吹き鳴らし、死者たちを蘇らせる軍団の長よ！ 御機嫌よう、ミカエルよ、天の全軍団を前にしても、神の玉座を前にしても第一位に立つ天使よ！」⁷。

〈02〉それから神の母は全天使をもまた同様に褒め称えると、人々が苦しむ様子を見たいと思われ、司令官ミカエルに言いました——「お願いですから、地上のすべてについて教えてください」。司令官は答えました——「慈悲深い神の母よ、仰せの通り、地上のすべてをあなたにお見せいたしましょう」。

すると聖なる神の母は言いました——「キリスト教徒が苦しんでいる彼の地にはどれだけの苦悩があるのでしょうか？」。司令官ミカエルは答えました——「苦悩の数は多く、数え上げることができないくらいです」。

慈悲深い神の母は言いました——「どうか天上と地上のすべてを見せてください」。

〈03〉司令官が南の方からきた天使たちに姿を現すようにと命じると、地獄

⁶ 7つの天を戴いた来世というシリア起源の表象は、3つの天を前提としたもっと古い来世表象の後を受けて発生したものである。

⁷ このスラヴ人翻訳者は神の母およびミカエルに対する賛辞の数々に困惑し、いくつか取り違えをしている。もっともこの翻訳者がたんなる写本者だとすれば話は別である。

の口がぼっかりと開き、神の母は地獄で苦しむ人々を目の当たりにされました。地獄には数多の男女がいて、涙が滝のように流されていました。慈悲深い神の母は司令官に尋ねました——「これは何者ですか？」。

司令官は答えました——「これは父⁸と子と聖霊を信ぜず、神を忘れ、我々に奉仕すべく神によって創られた被造物を信じ、それらを神と呼んだ者たちです。彼らは太陽に月、大地に水、獣に蛇の類、あるいは人の似姿、あるいは石像を、すなわちトロヤン、ホルス、ヴェレス、ペルウンを信じ、それらを神へと祀り上げ、性悪な悪魔を信じ、今日に至るまで悪の暗闇に留まっているのです⁹。まさしくそれゆえにここでこうして苦しんでいるのです。」

〈04〉 聖なる神の母は別の場所に漆黒の闇があるのを目にし、尋ねました——「この漆黒の闇は何ですか？ そこには誰が住んでいるのですか？」。司令官は答えました——「あそこには多くの人々が住んでいます」。そのとき聖なる神の母は言いました——「闇よ、晴れるがよい、あそこの苦悩もまた私に見ることができるよう」。すると苦悩を見張っていた天使たちは答えました——

⁸ この「父」という語に先行するテキストは、1602年付け写本から付加されたものである。12世紀の写本には冒頭部が欠落しており、やっとここから、すなわち「とи」という接続詞から始まっている。

⁹ ギリシャ語のテキストにはないこの下線部はすべて、古代スラヴ人による加筆だが、12世紀の写本におけるそのテキスト自体が既に変質を蒙っている。したがってここでの翻訳は推測に基づいたものである。スラヴ語ヴァージョンの作者には明らかに、同胞の異教信仰を打倒しようという目論見があった。ホルス [Хорс 太陽神で、ダージボク Даж-бог と同一視される]、ヴェレス [Велес 富と家畜の神]、ペルーン [Перун 雷、稲妻の神で戦士の守護神] の名は、いわゆるネストルの年代記、すなわち『原初年代記 Начальная летопись (過ぎし歳月の物語 Повесть временных лет)』の907年、971年、980年の項で言及されている。大公ヴラヂーミルは980年、キエフの「丘の上に偶像を立てた」が、なかでもペルーンは「木製で、頭部は銀、口髭は金でできていた」[國本哲男他訳『ロシア原初年代記』(名古屋大学出版会、1987年)、93頁参照]。トロヤン [Троян 天、地、地下の三界を支配する神とされるが、詳細は不明] については、アポクリファ『聖使徒たちの言葉と啓示 Слово и откровение святых апостол』と『イーゴリ遠征譚 Слово о полку Игореве』において言及されるだけである [木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』(岩波文庫、1983年) 21頁他参照]。つまりは、ダキア [今日のルーマニア] 征服王たるローマ皇帝トラヤヌスの彫像がスラヴ南方、ドニエプル下流域に至るまでの諸地域に幅広く分布しており、それらがスラヴの諸種族によって神として崇められていたということである。

「7つの太陽よりも明るいあなたさま最愛の御子が現れるまでは、あの者たちに光を見せてはならぬと命じられております」。

聖なる神の母は悲しみにくれ、天に向かって目を上げ、見えざる御子の玉座を仰ぎ見ながら¹⁰、言いました——「父と子と聖霊の名においてこの闇は晴れるべし、あそこの苦悩が私にも見えるように」。

すると闇は晴れ渡り、7つの天が現れると、そこには男女大勢の人々がいて、涙が滝のように流され、激しい叫び声が飛び交っていました。聖なる神の母は彼らの姿を目にすると、涙ながらに彼らに言いました——「いったい何をしでかしたのですか、不幸な者たちよ、呪われた者たちよ、破廉恥な者たちよ、どうしてそこへ落ち込んでしまったのですか？」。

しかし彼らからは声一つ、答え一つ聞こえてきませんでした。見張りの天使たちは言いました——「どうして何も話さないのですか？」。すると苦しんでいる者たちは言いました——「ああ、慈悲深い神の母よ、私たちはかつて一度も光を見たことがなく、高いところを見上げることすらできないのです」。聖なる神の母は彼らに目を向けると、激しく泣き出されました。

苦しんでいる人々は、そんな神の母の姿を見て言いました——「どうして私たちのところへおいでになったのですか、聖なる神の母よ？ あなたの慈悲深い御子は地上に降臨されたとき、私たちに何一つお尋ねになりませんでしたし、族長のアブラハムさまも、預言者モーセさまも、洗礼者ヨハネさまも、神の最愛の使徒パウロさまもまた、何一つお尋ねにはなりませんでしたのに。それなのにあなたは、至聖なる神の母であり調停者であるあなたは、キリスト教徒の砦であり、神に祈ってくださる。そんなあなたがどうして不幸な境涯にあ

¹⁰ スラヴ人訳者は、簡略化されたギリシャ語の単語を誤読したために、「天に向かって」の代わりに「天使たちに向かって」と訳している。さらに続いて、ちょっと考えられないような不注意のために、このギリシャ語テキストにはないフレーズの中で、「御子」とすべきところを「父」としているが、この過ちは他のテキストでも多々散見される。この2つの間違いについては指摘するにとどめ、翻訳中に残しておく必要はあるまい。

る私たちのもとへおいでになったのですか？」¹¹。

そのとき聖なる神の母は司令官ミカエルに言いました——「この者たちの罪は何ですか？」。ミカエルは答えました——「これは、父と子と聖霊を信ぜず、そして聖なる神の母よ、あなたを信じなかった者たちです。この者たちはあなたの御名を説き広めようせず、我らが主イエス・キリストがあなたからお生まれになり、受肉され、洗礼によって地上を祓い清めてくれたことを認めようとしなかったのです。まさしくそれゆえにここでこうして苦しんでいるのです」。

聖なる神の母は再び涙を流され、彼らに言いました——「お前たちはどうして誘惑に負けたのですか？ まさかお前たちは、私の名前が生きとし生けるものすべてによって崇められていることを知らないのですか？」。聖なる神の母がそのように言うと、彼らは再び闇に覆い隠されてしまいました。

〈05〉 そのとき司令官が神の母に言いました——「慈悲深い神の母よ、今度はどちらへ参りましょうか？ 南の方でしょうか、北の方でしょうか？」。慈悲深い神の母は言いました——「南の方へと参りましょう」。するとケルビムたち、セラフィムたち、それに四百の天使たちは身を翻し、神の母を火の大河が流れる南の方へと案内しました。

そこには数多の男女がいて、その誰もが大河に浸かっていました。腰まで浸かっている者もあれば、腋の下まで浸かっている者もあり、首まで浸かっている者もあれば、頭まで浸かっている者もいました。

それをご覧になった聖なる神の母は、大きな声で泣き出され、司令官に尋ねました——「腰まで火に浸かっているのは何者ですか？」。司令官は言いました——「これは父母から呪いを受けた者たちで、それゆえにここで呪われた者として苦しんでいるのです」。

¹¹ ここで問題となっているのは、やがて分かるように、三位一体と神の母という教義を拒否した異教徒、いわゆる非キリスト教徒のことなので、彼らを慰問すべきは、アブラハムにモーセ、洗礼者ヨハネ、異邦人の使徒パウロの責務とされているのであり、さらにキリストもまたその無限の慈悲によって地獄までも分け隔てなく訪問することが期待されているのである。だが彼らの誰一人として地獄を訪問せず、ただ一人神の母のみが冥府へ下降したのである。

神の母は再び尋ねました——「では、腋の下まで火に浸かっているのは何者ですか?」。司令官は言いました——「これは、自分の教父を虐待し、殴りつけた者たち、それにまた姦淫の罪を犯した者たちで、まさしくそれゆえにここで苦しんでいるのです」。

至聖なる神の母は尋ねました——「首まで燃える炎に沈んでいるのは何者ですか?」。天使は答えました——「これは人肉を食した者たちで、まさしくそれゆえにここでこうして苦しんでいるのです」¹²。

聖なる神の母は言いました——「それでは頭まで燃える炎に浸かっているのは何者ですか?」。大天使は答えました——「これは、我らが母よ、聖なる十字架を手にし、『十字架こそ我が証人なり!』と偽りの誓いを立てた者たちです。天使たちでさえ身を震わせずには目にできず、戦きとともに跪拝するこの十字架を、この者たちはどんな苦悩が待ち受けているかも知らずに手にし、その十字架にかけて誓おうとするのです。まさしくそれゆえにここでこうして苦しんでいるのです」。

<06> 聖なる神の母は、両足を吊るされ、蛆虫に蝕まれている男を目にすると、天使に言いました——「これは何者ですか? この男はどんな罪を犯したのですか?」。司令官は答えました——「これは自らの金と銀を元手に利益を貪った男で、それゆえに永遠の苦しみを受けているのです」。

それから聖なる神の母は齒を吊るされた女を目にしました。女の口からはあらゆる種類の蛇が這い出てきて、女の乳房を齧っていました¹³。それをご覧になった至聖なる神の母は天使に尋ねました——「この女は何者ですか? どん

¹² 「人肉を食した」の部分は、ギリシャ語テキストでは次のように説明されている——「至聖なる神の母は言いました——『人間が〈人肉を食する〉ことなどできるものでしょうか?』司令官は言いました——『お聞きください、至聖なる神の母よ、これからお話し申し上げますから。それは、自分の赤子を揺り籠から取り出し、犬の餌の中に投げ入れた者たちか、あるいは自分の兄弟を王や有力者に不当に売り渡した者たちなのです。この連中は人肉を食したので、それゆえに罰せられているのです』」。

¹³ 「乳房」という語は、ギリシャ語テキストにも、スラヴ語テキストにも欠落している。アテネ版のギリシャ語テキストはこの語を補填している。

な罪を犯したのですか?」。司令官は答えて言いました——「この女は、我らが母よ、親類や隣近所の人のところへ出入りし、彼らの話に聞き耳を立て、誹謗中傷をでっち上げ、仲違いさせようとしたのです。まさしくそれゆえにこの女はこのように苦しんでいるのです」。聖なる神の母は言いました——「そんな人間は生まれてこない方がよかったですように」¹⁴。

〈07〉ミカエルは言いました——「聖なる神の母よ、あなたはまだ大きな苦しみをご覧になってはおられません」。聖なる神の母は司令官に言いました——「ではここを出発し、ありとあらゆる苦しみを見に参りましょう」。ミカエルは言いました——「ではどちらへ参りましょうか、慈悲深い神の母よ?」。聖なる神の母は言いました——「北の方へと参りましょう」。こうしてケルビムたち、セラフィムたち、それに四百の天使たちは身を翻すと、慈悲深い神の母をそこから北の方へと連れて行きました。

そこでは火の雲が広がり、その真ん中にはさながら炎か火のような寝床があって、寝床には数多の男女が横たわっていました。聖なる神の母はその光景を目にされると、溜息をつかれ、司令官に言いました——「これは何者ですか? どんな罪を犯したのですか?」。司令官は言いました——「これは、我らが母よ、聖なる日曜日の早朝祈祷に起きて参加しようとせず、怠けるために死人のように寝そべってばかりいる者たちで、それゆえに苦しんでいるのです」。

聖なる神の母は言いました——「けれどももしも朝に起床することができないとしたら、その者はいったいどうしたらいいのでしょうか?」。ミカエルが答えました——「お聞きください、至聖なる神の母よ、もしも誰かが自宅の四方から火の手があがるのを、自宅が炎に包まれ、そして自宅が燃え上がるのを目の当たりにしながらも、それでもなお起きあがることができないのだとすれば、その場合はその者に罪はないのです」¹⁵。

¹⁴ 「マタイ伝」26章24節。

¹⁵ この良心の問題を扱った事例はスラヴ人信徒の興味を大いにそそったに違いない。なぜなら『神の母の苦悩巡礼』のどのヴァージョンを取っても、この事例が欠けていることはないからである。この事例は、大半のアポクリファのテーマとなっている、問答形式の決疑論を想起させる。

〈08〉 別な場所で火まみれのテーブルとその上で燃え上がる数多の男女を目にすると、至聖なる神の母は司令官に尋ねました——「これは何者ですか？ どんな罪を犯したのですか？」。司令官は言いました——「これは、司祭たちを敬わず、司祭たちが神さまの教会からやってきたとき¹⁶、彼らを起立して出迎えようとはしない者たちで、それゆえに苦しんでいるのです」。

〈09〉 聖なる神の母は鉄の木を目にされました。その木の枝という枝の先端には鉄の鉤がついていて、そこに数多の男女が舌を吊るされていました。聖なる神の母はこの様子を目にすると、涙を流し、ミカエルに尋ねました——「これは何者ですか？ どんな罪を犯したのですか？」。司令官は答えました——「これは、誹謗中傷の徒であり、仲違いの種をばらまき、兄弟と兄弟を、夫と妻を離別させた者たちです」。至聖なる神の母は言いました——「兄弟同士が離別するなどということがどうしてできるのでしょうか？」。

ミカエルは言いました——「お聞きください、至聖なる神の母よ、あの者たちのことをお話しいたしますから。もしも誰かが洗礼を受けようとか、あるいは自らの罪を懺悔しようとすると、この誹謗中傷家どもはその人を救いへと教え導くどころか、翻意させてしまったのです。それゆえにこの連中は永遠に苦しんでいるのです」。

〈10〉 また別な場所で聖なる神の母は、四肢を吊るされている男を目にしました。爪という爪の先端からは血がだらだらと流れ、その舌は燃え上がる炎に縛られており、男はため息をつくことも、「主よ、我を憐れみたまえ！」と言うこともできませんでした。至聖なる神の母はその男をご覧になると、泣き崩れ、「主よ、憐れみたまえ！」と言ひ、この祈りを三度唱えられました。するとこの苦しみを司る天使が神の母のところへやってきて、その男の舌を自由にやりました。至聖なる神の母は天使に尋ねました——「こうした苦しみを耐え忍んでいるこの憐れな男は何者ですか？」。

¹⁶ ギリシャ語テキストでは、主語が明示されないまま、「教会へやってくる」となっている。スラヴ人訳者は、教会から家々へと祝福か募金のためにやってくる司祭のことを思い浮かべていたに違いない。

天使は言いました — 「これは儉約家にして¹⁷ 教会に仕える者ですが、この男は神の意志を実現しようするかわりに、教会の備品の数々を売り飛ばし、『教会で働く者は教会を生活の資とする』¹⁸ と嘯っていたのです。それゆえにこの男はここで苦しんでいるのです」。至聖なる神の母は言いました — 「それは因果応報というものです!」。すると天使は再びその男の舌を縛ってしまいました。

〈11〉 司令官は言いました — 「参りましょう、我らが母よ。司祭たちが苦しんでいる場所をお見せいたしましょう」。神の母は行って、爪の先端を吊るされた司祭たちをご覧になられました。彼らの頭からは火が立ち上り、彼らを焼き焦がしていました。至聖なる神の母はこの様子を目にすると、言いました — 「これは何者ですか? どんな罪を犯したのですか?」。ミカエルが答えました — 「これは、聖体礼儀を執り行ない、神の玉座に仕える者たちで、自らをそれに値する人間だと言い張っていました。しかしこの者たちは奉納の準備をするとき、慎重にことを運ぶ代わりに¹⁹、パンの欠片がさながら神さまの星々のように²⁰ 地面へと落ちるにまかせたのです。そのとき恐るべき玉座はぐらつき、神の台座は震え出したのです。それゆえに彼らはこのように苦しんでいるのです」。

〈12〉 それから聖なる神の母は、一人の男と翼を持った三頭の竜を一匹ご覧になられました。さて竜の頭のうちの二つは男の両目に、残る一つの頭は男の唇に向けられていました。至聖なる神の母は司令官に尋ねました — 「竜のた

¹⁷ スラヴ人翻訳者は「儉約家」という語を解説できず、「イコンと教会に仕える者」と訳している。

¹⁸ 「コリント人への第一の手紙」9章13節。

¹⁹ ここで問題とされているのは、「聖体礼儀」(ミサ)の第一部、すなわち「プロスコミヂヤ проскомидия」である。そこで司祭は、「聖パン просфора」の一部を千切り取る。そのパンの欠片はやがて聖別され、生者や死者ために配られるものである。それから司祭は千切ったパンの欠片を、一つとして地面に落とすことのないように、パテナ(聖体のパンをおく小皿)に集めなければならないのである。

²⁰ ギリシャ語テキストでは「星々が地面に落ちた」となっている。星とは千切り取られた聖パンの欠片のことである。

めに休息できないでいるこの憐れな男は何者ですか?」。司令官が言いました——「この男は、我らが母よ、人々に聖書を読み聞かせる一方で、自分では福音書の教えに従おうとしなかったのです。人々に教えを垂れておきながら、自分では神の意志を実現しようとはせず、不義密通と無法の限りを尽くしていたのです」。

〈13〉 主の軍団を率いる司令官は言いました——「先へ参りましょう、至聖なる神の母よ。天使や使徒の位階にある者たちが苦しんでいる場所をお見せいたしましょう」。聖なる神の母が目の当たりにしたのは²¹、男たちが燃え上がる炎の上に横たわり、蛆虫がその男たちを眠りも忘れて貪っている場所でした。

聖なる神の母は言いました——「これは何者ですか?」。ミカエルが答えました——「これは天使と使徒の衣服を纏った者たちで、地上では総主教だ、主教だと言ってふんぞり返り、聖なる司祭と評判されていました。しかし天上においては、天使と使徒の衣服を纏う人に相応しき行動をしなかったために、聖人と呼ばれることのなかった者たちです。それゆえに彼らはここでこうして苦しんでいるのです」。

〈14〉 それから至聖なる神の母は、爪という爪を吊るされた女たちを目になさいました。女たちの口からは炎が噴き出し、女たちを全身焼き焦がす一方、その炎の中から蛇が数匹這い出してきて、女たちに絡みついていた。女たちは叫んでいました——「我らを憐れみたまえ。我らだけが苦しみという苦しみを人一倍味わっているのですから」。聖なる神の母は泣き崩れ、言いました——「この女たちはどんな罪を犯したのですか?」。司令官が答えました——「これは司祭の妻たちです。司祭たる夫を敬うことがなく、夫の死後に他の男に嫁いだがゆえに、ここでこうして苦しんでいるのです」。

〈15〉 神の母は、別な女たちが火の中に横たわり、あらゆる種類の蛇に貪り食われているのをご覧になると、言いました——「この女たちはどんな罪を犯

²¹ 12世紀の写本ではここから1頁分が欠落している。「…目の当たりにしたのは」に続くテキストは1602年の写本に依拠している [脚注25参照]。

したのですか?」。ミカエルは答えました——「これは尼僧たちです。この尼僧たちは色欲のためにその身体を売ったがゆえに、ここでこうして苦しんでいるのです」。

〈16〉 司令官は言いました——「先へ参りましょう、至聖なる神の母よ。数多の罪人たちが苦しんでいる場所をお見せいたしましょう」。聖なる神の母は火の大河をご覧になられました。その大河たるや、大地のすべてを貪り食らう滔々たる火の流れのようで²²、その波間には数多の罪人がおりました。神の母はこの様子をご覧になると、泣き崩れ、言いました——「この女たちはどんな罪を犯したのですか?」。司令官は答えました——「これは放蕩者に姦通者、泥棒、近所の人々が話していることをこっそり盗み聞きする者、喧嘩好き、誹謗中傷に明け暮れる者、他人の畑を刈り取るか、あるいは滅茶苦茶にした者、断食の終わるのを待てない者²³、他人の働きで糊口を凌ぎ²⁴、夫婦を別れさせようとする者、酔っ払い、情の薄い公、神の意志を実現しようとしなかった主教に総主教に皇帝、守銭奴、利子で儲ける輩、無法者たちです」。

至聖なる神の母はこのことを耳にされると、泣き崩れ、言いました——「ああ、なんと憐れな罪人たちよ!」。さらに神の母は司令官に言いました——「これらの罪人たちの苦しみのなんとひどいことでしょう。こんな人間たちは生まれてこない方がよかったですように!」。

〈17〉 ミカエルは神の母に言いました——「なにゆえにお泣きになるのですか、聖なる神の母よ? あなたはこれまで大きな苦しみをご覧になったことがないのですか?」。至聖なる神の母は言いました²⁵——「私を案内してください

²² 12世紀のギリシャ語テキストでは、「まるで滔々たる血の流れのようで、その流れの下にあるものすべてを貪り食べていました」となっている。スラヴ語テキストは「貪り食べる」という語を残してはいるものの、より最近のギリシャ語テキスト——そこでは「(火の大河は) 大地という大地を嘗め尽くしてはいました」となっている——に対応している。

²³ ギリシャ語テキスト中の「定刻前に断食を中断する者」に依拠したこの訳は、そもそものフレーズ自体が激しい改変を蒙っているので、ひどく不確かなものである。

²⁴ 旧約の「詩篇」127 [128] 編第2節——「あなたは自分の手の勤労の実を食べ、幸福で、かつ安らかであろう」——と対照を成している。

²⁵ これ以降は再び12世紀のテキストである [脚注21参照]。

い。あらゆる苦しみを見ることができるよう」。ミカエルは神の母に言いました——「お望みのところへ参りましょう、慈悲深い神の母よ。東の方へ参りましょうか、それとも西の方へ参りましょうか？ 右の方にある天国へ参りましょうか、それとも大きな苦しみが待つ左の方へ参りましょうか？」。至聖なる神の母は言いました——「左の方へと参りましょう」。

至聖なる神の母がそう言うと、ケルビムたちとセラフィムたちと四百の天使たちは身を翻し、至聖なる神の母をそこから左の方へと連れてゆきました。

行った先で神の母が目にしたのは火の大河で、その大河の周囲は漆黒の闇に閉ざされていました。大河には数多の男女が横たわっていて、大鍋に入れられたかのようにぐつぐつと煮立てられていました。さながら海の波が罪人たちの頭上で砕け散るかのようで、波が高まると、罪人たちは500 mほども下方へと叩き落され、「正しき裁き手たる神よ、我らを憐れみたまえ」と言うことさえできないのでした。蛆虫たちが眠りも忘れて罪人たちを貪り食っていました。聞えるのは歯軋りの音だけでした。

罪人たちを見張っていた天使たちは、至聖なる神の母の姿を見ると、異口同音に叫びました——「神よ、あなたは聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。そして神の母よ、私たちはあなたを祝福します。あなたとあなたから生まれた神の御子を祝福いたします。私たちは太古の昔より光を目にしたことなどなかったのですが、今は、神の母よ、あなたのおかげで光を目にしているからです」。

天使たちはもう一度異口同音に叫びました——「御機嫌うるわしゅう、慈悲深い神の母よ！ 御機嫌うるわしゅう、永遠の光の輝きよ！ あなたもまた御機嫌うるわしゅう、全宇宙のために主なる神に祈りを捧げる司令官ミカエルよ！ なんとすれば我らもまた罪人たちが苦しむさまを目にし、我らもまた深く嘆き悲しんでいるからです」²⁶。

²⁶ 「…が、今は、神の母よ、あなたのおかげで光を目にしているからです」以降の部分で、スラヴ語テキストと対応するのは、最近のギリシャ語テキストだけである。

神の母は、天使たちが罪人たちのことで心痛め、深く悲しんでいるのをご覧になると、泣き崩れました。すると罪人たちは異口同音に叫びました——「あなた方がこの闇の世界においでになり、私たちがどのような苦しみの最中にあるかを目にされたのはありがたいことです。至聖なる神の母よ、どうか司令官ともどもお祈りくださいまし！」。罪人たちの泣き声と叫び声を耳にすると、神の母と天使たちもまた、一層激しく涙に暮れ、叫んで言いました——「主よ、我らを憐れみたまえ！」。

神の母と天使たちが祈りを終えると、大河の嵐も火の波も静まり返り、罪人たちがからしの種のように姿を現しました。

聖なる神の母はこの様子をご覧になると、泣き崩れ、言いました——「この大河は、この波はいったい何でしょうか？」。司令官は答えました——「この大河はこれすべてタール、この波はこれすべて火なのですが、そこで苦しんでいるのは、神の御子、我らが主たるイエス・キリストを迫害したユダヤ人たち²⁷です。ここにいるのはみな、父と子と聖霊の名において洗礼を受けなかった²⁸異教徒か、キリスト教徒でありながら、悪魔を信仰し、神と聖なる洗礼を蔑ろにした者たちです。ここにいるのはさらにまた、聖なる洗礼の後で自らの教父母、あるいは実の母親か実の娘とふしだらな関係に陥った者たち、毒を一服盛って人々を死に至らしめた者たち、武器で人々を殺した者たち、実の子供を窒息死させた者たち²⁹です。それゆえにこの者たちは、それぞれの行いに応じて苦しむことになるのです」。

聖なる神の母は言いました——「それは因果応報というものです！」。

すると再び荒れ狂う大河が罪人たちに火の波とともに襲いかかり、漆黒の闇

²⁷ ギリシャ語テキストは「ユダヤ人」とは名指さず、たんに「…を迫害した人々」として
いる。

²⁸ ここで列挙されている内容全体から考えると、ギリシャ語テキストと同様に、抜け落ちた否定辞を復元し、「洗礼を受けた」ではなく「洗礼を受けなかった」とすべきであろう。

²⁹ 子供を故意に、あるいは睡眠中偶然に窒息死させてしまう罪については、ロシアの聴罪司祭用の書物の中で予め定められている。このフレーズはギリシャ語テキストにはない。

が彼らをすっぽりと覆い隠してしまったのでした。ミカエルは神の母に言いました —「いったんこの闇に閉じ込められてしまえば、神はもはやその者のことなど思い出しはしないでしょう」。至聖なる神の母は言いました —「おお、なんと憐れな罪人たちよ！ なんとなればこの火の炎は決して絶えることがないのですから」。

〈18〉 司令官は神の母に言いました —「先へ参りましょう、至聖なる神の母よ。火の湖をご覧に入れましょう。そこではキリスト教徒たちが苦しんでいる様子を目にされることでしょう」。神の母は目を凝らし、彼らが発する号泣と怒号を耳にされたが、罪人自身の姿を見ることはできませんでした。神の母は言いました —「ここにいる者たちは何者ですか、どんな罪を犯したのですか？」。ミカエルは答えました —「これは、洗礼を受け、言葉では十字架を受け入れたのですが、悪魔の所業に身を委ね、懺悔する時間を持つとしなかった者たちで、それゆえにここでこうして苦しんでいるのです」。

〈19〉 至聖なる神の母は司令官に言いました —「あなたに一つ、たっぺのお願いがあります。どうか私もまた火の湖へと下り、キリスト教徒たちとともに苦しむことができるようにしてください。なんとなればあの者たちは我が御子の息子、娘と呼ばれていたのですから」。司令官は言いました —「天国にてご休息ください」。至聖なる神の母は言いました —「お願いですから、どうか、我ら皆して罪人たちのために祈るようにと、七つの天の軍団と天使の全軍を説得してください。どうか主なる神が我らの声をお聞き届けになり、罪人たちに慈悲をお施しくくださいますように！」。

司令官は言いました —「主なる神は生きておられる！ その名は偉大であられる！ 私たちは昼に七度、夜に七度³⁰、主を褒め称え、その都度私たちはまた罪人たちのためにも、我らが母よ、主の前に額ずいているのです。しかし主は我らの声を少しもお聞き届けにならないのです」。

³⁰ ここで天使たちは「詩篇」によって指示された日課のサイクルを倍化させている。「詩篇」118 [119] 篇第164節には、「わたしはあなたを一日に7度褒め称えます」とある。

至聖なる神の母は言いました——「お願いですから、どうか天使の軍団に、私を天の高みへと運び上げ、見えざる父の御前に立たせてくれるよう命じてください」。

〈20〉 司令官が命令を下すと、ケルビムたちとセラフィムたちが現れ、慈悲深い神の母を天の高みへと運び上げ、見えざる父の御前、その玉座の傍らに立たせました。神の母は慈悲深い我が御子に向かって両手をかざし、言いました——「主よ、どうぞ罪人たちに御慈悲を。この目で見ましたが、とても見るに忍びません。どうか私にもあのキリスト教徒たちと一緒に苦しませてください！」。

すると神の母に一つの声が届き、こう告げました——「どうしてあの者たちを憐れむことなどできようか？ 我が御子の掌には打ち込まれた釘が見えるというのに。だめだ、あの者たちを憐れむなどできない相談だ」。

そのとき至聖なる神の母は言いました——「主よ、私は不信心なユダヤ人のためをお願いしているのではありません。キリスト教徒たちのためにあなたの御慈悲を乞い願っているのです」。

神の母に一つの声が届き、こう告げました——「私は、あの者たちが血を分けた兄弟たちさえ憐れまなかつたことを知っている。だめだ、あの者たちを憐れむなどできない相談だ」。

すると至聖なる神の母は言いました——「主よ、どうぞ罪人たちに御慈悲を！ 主よ、どうぞあなたの御手になる被造物に御慈悲を。なんとなればあの者たちは地上のいたるところで私の名前に加護を願³¹、どんな苦しみの中にあっても、この地上のどんな場所にいても、『我らが母よ、至聖なる神の母よ、我らを助けたまえ』と唱えているのですから。そして人は生まれるや、『聖なる神の母よ、我を助けたまえ』と口にするのですから」。

主は神の母に言いました——「よく聞くがいい、至聖なる神の母よ、あなた

³¹ スラヴ語テキストでは「あなたの名前」となっているが、後続部分から判断すれば、それは過ちである。ギリシャ語テキストでは「私の名前」となっている。

の名に加護を願わぬ者などいないのであってみれば、天上であれ、地上であれ、私もまたそうした者たちを決して見捨てたりはしない。

至聖なる神の母は言いました——「預言者モーセはどこにいるのですか？ 預言者という預言者たちは、それに一度として罪など犯したことのない教父たちよ、あなた方はどこにいるのですか？ 神の寵児パウロはどこにいるのですか？ キリスト教の誉れたる日曜日はどこにあるのですか³²？ アダムとイヴがそのおかげで呪詛から救われた聖なる十字架の美德はどこにあるのですか？」。

そのとき司令官ミカエルと全天使は言いました——「主よ、罪人たちに御慈悲を！」。モーセが大声で叫びました——「主よ、御慈悲を。なんとなればあの者たちにあなたの律法を授けたのは、他ならぬこの私なのですから」。ヨハネが大声で叫びました——「主よ、御慈悲を。なんとなればあの者たちにあなたの福音書を教え諭したのは、他ならぬ私なのですから」。パウロが大声で叫びました——「主よ、御慈悲を。なんとなれば教会という教会にあなたの書簡を運び伝えたのは、他ならぬ私なのですから」。

すると主なる神は言われました——「みなの方、よく聞くがいい。もしも裁きが私の福音書に従って、あるいは私の律法に従って下されるなら、もしも裁きがヨハネのなした福音書の教えに従い、パウロが運び伝えた書簡に従って下されるのであれば、あの者たちがその裁きを受け入れるべきは当然のことである」。

天使たちはただ、「主よ、憐れみたまえ、あなたは正しい！」と言う以外、口にすべきことを知りませんでした。

至聖なる神の母は言いました——「主よ、罪人たちに御慈悲を。なんとなれ

³² 「日曜日」は、ロシアでもギリシャでも、アナスタシヤ [Анастасияはギリシャ語で「復活した女」の意]、つまり人間の姿を取った復活の通称である。この祈りはスラヴでは一般的なものであり、ヴェセロフスキーによれば日曜日信仰の起源は10世紀まで遡れるらしい (Rev. du Min. de l'I.P., 1877, II, 187-188, en russe)。ギリシャ語テキストでは「日曜日」ではなく、「キリスト教徒の砦」となっている。

ば彼らはあなたの福音書を受け入れ、あなたの律法を守ってきたのですから」。

すると主は神の母に言われました——「至聖なる神の母よ、よく聞くがよい。たとえ彼らのうちの誰かが悪をなしながら、自らがしたことを懺悔しなかったとしても、それでもまだあなたはその人のことよく言っている。しかし、もしも彼らが私の律法に習熟しながらも、再度悪をなしたとすれば、彼らが悪から足を洗い切れない以上、この私にこれまで言われてしまった言葉以外の何が語れようか。すなわち、彼らはやがてその悪意に応じた報いを受けるであろう、と」³³。

主の御言葉を耳にした聖人たちの誰ひとり、どう答えてよいのか分かりませんでした。

至聖なる神の母は、聖人たちの誰ひとり何も進んで主張しようとはせず、また主が聖人たちの言葉に耳をお貸しになるどころか、罪人たちからその恩寵を遠ざけてしまわれたのをご覧になると、こう言いました——「私に『あなたさまには御機嫌うるわしゅう！』と告げ知らせてくれた司令官ガブリエルはどこにいますか？ なんとすれば彼は太古の昔より父なる神の召命を受けてきたのに、今は罪人たちのことなど一顧だにしていないからです。その頭上に雹を掲げ、その雹を人々の悪行によって墮落した大地へと降らせる巨人はどこにいますか？ その後主は自らの御子をお遣わしになり、大地の実りを確かなものにしてくださいました³⁴。玉座に仕える者たちはどこにいますか？ 神学者ヨハネはどこにいますか？³⁵ どうしてあなた方は我らとともに立ち、罪を犯したキリスト教徒たちのために主に懇願してくれないのですか？ まさかあなた方は、溢れる涙のために罪人の誰一人見えないのですか？ おい

³³ この増補されたスラヴ語テキストもまた改変されている。とくに「悪から足を洗う」という語句は不確かである。セルビア語ヴァージョンの一つには、「もしも彼らが悪に対して悪で報いたら」とある。

³⁴ ここではタルムードにその名残をとどめる伝説が暗示されている。すなわち巨人ガブリエルを雷と大地の実りを支配する天使だとする伝説である。この一節は全体的に改変されており、ギリシャ語テキストのどれ一つとしてそれを修正する助けにはならない。

³⁵ いわゆる福音書作者ヨハネのこと。

てください、天上に住まうすべての天使よ！ おいでください、主によって認められたすべての義人たちよ！ あなた方には罪人のために祈ることが許されているのですから。あなたもまたおいでください、ミカエルよ。あなたは神の玉座の前に立つ靈的存在の第一人者なのですから。おいでになって、全員に命じてください。見えざる父の足もとに身を投げ出しましょうと、そして父が我らの願いをお聞き届けになり、罪人たちに御慈悲を垂れたまうまで、大地から離れないようにしましょうと！」。

そのときミカエルは玉座の前の大地に深々と平伏しました。すると天上のあらゆる天使も聖人も、あらゆる位階の靈的存在もまた同様に平伏したのでした。

主は聖人たちが懇願するのをご覧になると、その唯一無二の御子のために御慈悲を垂れられ、言いました——「地上に降るがよい、我が最愛の息子よ。そして聖人たちの祈りをしかと見届け、罪人たちにその顔を見せてやるがよい」。

主がその見えざる玉座から降りられると、闇に閉じ込められていた者たちは主の姿を目にし、皆して異口同音に叫びました——「我らに御慈悲を、神の御子よ、我らに御慈悲を、万世の王よ！」。

そのとき主は言いました——「みなの方、聞くがよい！ 私は天国を築き、自分の姿に似せて人間を創り、人間を天国の主人とし、人間に永遠の生命を授けた。しかるに人間たちは我が命に背き、自らの意志に基づいて罪を犯し、死にその身を委ねてしまった。だが私は、我が手になる被造物が悪魔に苦しめられるのを目にしたくなかったので、地上に降り立ち、乙女の肉体に宿り、人間たちを奴隷状態と原初の呪いから解き放つために十字架へと上ったのだ。私は水を頼んだのだが、与えられたのは酢を混ぜた胆汁であった。我が手は人間を創り上げたのに³⁶、人間は私を墓場に横たえたのだ。最後に私が地獄へと降り、敵を蹂躪し、私が選んだ者たちを蘇らせ、ヨルダン河を祝福したのは、お

³⁶ 1897年のテキストはここに次のフレーズを付加している——「ユダヤ人の手は私を十字架に釘付けにしたのだ」。

前たちを原初の呪いから癒すためだったというのに、お前たちは少しも自らの罪を懺悔しようとしなないどころか、ただ舌先三寸でキリスト教徒を自称するだけで、私の戒律を守ろうとはしなかった。まさしくそれゆえに、お前たちは尽きることのない火の中にいるのであり、私はお前たちに慈悲を垂れようとはしなかったのだ。だが今日の日、私をお前たちのもとへと遣わされた我が父の御慈悲のゆえに、お前たちのために多くの涙を流した我が母の祈りのゆえに、そしてお前たちのために大いに骨を折ってくれた司令官ミカエルと数多の殉教者の誓いのゆえに、日夜苦しんでいるお前たちにこうしてやることにしよう。すなわち聖木曜日〔受難週間の木曜日〕から聖三位一体祭の日までは休息を取り、父と子と聖霊を祝福するがよい」。

全員が答えました——「あなたの御慈悲に栄えあらんことを！」。

父と子と聖霊に、今日もいつの日も、そして未来永劫いついつまでも栄えありますように。アーメン。

第3章 注 釈

1. 出典

聖パウロの冥府降りと神の母の冥府降りの双方を続けて読んだことがある人にとって、後者が前者の派生物であることは火を見るより明らかであろう。粗筋がそっくりなら、地獄の住人とその責苦のカテゴリーも似たりよったりだし、対話における定型表現と登場人物たちの意見の数も一緒である。ここでは福音書から借用されたフレーズを一つ——「そんな人間は生まれてこないほうがよかったですように」[「マタイ伝」26章24節]——引用するにとどめておくが、他のフレーズを引用することもまたできるであろう。

神の母の冥府下降は独創的な作品ではまったくない。現存するもっとも信憑性の高いテキストによれば、それは天上への上昇とは結びつけられておらず、独創性を匂わせるようなものは何一つ持ち合わせていない。主要登場人物はもはや使徒ではなく、神の母だが、そのことこそが大いなる新しさなのである。パウロの冥府下降において神の母は、結末部の天国再訪の場面でパウロを救うために姿を見せるに過ぎず、この結末部もオリジナルテキストに後年付加されたもののように思われる。『神の母の苦悩巡礼』の神の母は、冒頭から主要登場人物である。この作品に意味を与えているのは神の母、そして罪人たちのために主に献げられる神の母の祈りに他ならないのである。

2. 着想

もしも『神の母の苦悩巡礼』が、教会では福音書のテキスト解釈に迷った挙句に地獄の苦しみは不滅という結論に達しているのにもかかわらず、神の裁きと慈悲の調停という困難な問題に対する一つの解答を信徒たちに提示する役割を担っているとすれば、神からこの調停の打開策を、いわば免罪のあかしを引き出すために必要十分な権威を持っていたのは他の誰でもない、神の母であっ

たことは論を俟たない。この作品では二つのテーマが混ぜ合わされている。神へのその強力なとりなし能力のゆえの神の母に対する賛美というテーマと、地獄は不滅とする破綻寸前の教義に対する修正というテーマである。

神の母はたんにそのとりなし能力ゆえに称揚されるのではない。アブラハム、モーセ、洗礼者ヨハネ、パウロ、そして愛息イエス自身をも上回る憐憫の情のよってもまた称揚されるのである。彼女は苦悩を目にして泣き崩れる。彼女が心動かされないのはただ異教徒やユダヤ人、それにある種のカテゴリーに属すキリスト教徒、すなわち背教者、近親相姦者、殺人者たちを目の当たりにしたときだけである。彼女は罪人たちの立場を情熱的に弁護する。彼女は決して意気阻喪することなく、天上のあらゆる天使や聖人に援助を呼びかける。すると神は、彼女によって惹き起こされた宇宙一体の懇願を前に、御子イエスを地上に派遣するのであり、降臨したイエスはこう宣告するのである。キリスト教徒を自称しながら、我が律法を守らなかった者たちを許すことはできないが、慈悲を垂れよう、と。

その慈悲とは、地獄の苦しみの一時的な——聖木曜日から聖三位一体祭までの——中断のことである。もしも時代とジャンルの双方に論理の完璧さを求めることができるとすれば、この中断が復活祭から聖三位一体祭までだけ続くのではなくて、受難週の日までをも含んでいることに驚く向きがあっても不思議はない。『パウロの黙示録』では、罪人たちがその苦悩から解放されるのは復活祭の日だけである（ここではすべての日曜日に解放されるという考えをとらない。エミール・テュルダニユは日曜日ごとに解放されると考えている。「スラヴ世界」誌、第1巻（1956年）、第4号、405頁⁽¹⁾ [第2部第1章脚注5参照])。この復活祭の日に苦悩が中断されるという着想は、様々な作者によって再三取り上げられてきた。もしも1438年のフィレンツェにおける公会議でギリシャ人雄弁家エフェソのマルコによって引用されたテキストが信頼するに足るものだとすれば、聖バジルは神に対して次のような祈りを捧げている——「どうか地獄に囚われている者たちのために我らの願いをお聞き届けください。我らは心から期待しております、あなたが彼らに何がしかの休息と慰安とをお

与えくださいますことを」。かくして神は休息と慰安の日として復活祭を指定したのだった。不幸にもこのテキストは、聖バジル作として知られる作品の中に見出されないままになっている。

一般的に地獄の苦しみを緩和したいという願望は、これまで何度も何度も表現されてきている。聖アウグスティヌスも、「神は、永遠の責苦を終わらせることなく、彼らに慰安か、あるいは中断をお施しくくださる」(『便覧 Enchiridion』 P.L., XI, 284, 5) という着想をきっぱりと拒絶しているわけではない。

いずれにしても本書で扱っているアポクリファ『神の母の苦悩巡礼』では、大罪人たちは罰されたままであるが、このことは信徒のもう一つの懸念に対応している。神はきっと悪を許すに違いないとしても、神はまたその悪に復讐してく下さるというわけである。『神の母の苦悩巡礼』はこうした復讐に彩られていればこそ、人々の心を慰めもするし、喜ばせもするのである。ドストエフスキーの登場人物イワン・カラマーゾフの思念において『神の母の苦悩巡礼』と「大審問官伝説」とを関連づけているのが他ならぬ悪の問題であることは、十中八九間違いないところである。

3. 構成

『神の母の苦悩巡礼』の構成はかっちりとしたものではない。

それでも何はさておき序章と結末部はあるように見える。序章は神の母と神の母によって呼び出された大天使ミカエルの会見である(1節-2節)。そして結末部は神の母の天上帰還とその懇願で始まり、主の決定と参列者一同の謝意に溢れた讃歌によって締め括られている(19節-20節)。

地獄の描写において最初に目に入る日没の場所には、異教徒たち、それに三位一体を信じないか、あるいは神の母への賞賛を拒絶した異端者たちが住まわされている。彼らは光を受け入れようとしなかったため、その責苦は漆黒の闇の中に留まるということである(3節-4節)。

続いて描かれるのは南の方、確固たる理由で救いの道の埒外におかれたキリスト教徒たち、すなわち父母に呪われた者たち、実の父母か宗教上の父母に背

いた者たち、偽りの誓いを立てた者たち、高利貸たち、中傷誹謗家たちが住まう場所である。彼らは様々な懲罰に喘いでいる（5節-6節）。

北の方には大きな苦しみがあるが、それは教会に対して罪を犯した人々——すなわち聖務日課への参加を怠る者たち、司祭を敬わない者たち、その兄弟たちを秘蹟から引き離そうとする者たち——のために予定されている苦しみである（7節-9節）。続いて教会の悪しき聖職者たちが登場する。教会の聖なる備品を掠め取る儉約家、朗読しているテキストに矛盾した行為をする朗読者、聖体礼儀をいい加減に執り行なう司祭、その名に値しない主教、再婚する司祭の妻、自らの誓いに不誠実な尼僧たちである（10節-15節）。

こうした特別なカテゴリーが終わると、次は「数多の罪人たち」の番で、不義密通者、泥棒、酔っ払い、仲違いの扇動者、高利貸等々と汲めど尽きせぬような列挙が続くが、そのリストでは俗界あるいは聖界の暴君たちもまた忘れられてはいない（16節）。

ここで進路が「左の方へと」変更される。左の方には火の大河があり、ユダヤ人、背教者、近親相姦者、毒殺者たちがぐつぐつと煮られている。火の湖もあるが、それは洗礼を受けながらも魂を悪魔に引き渡し、悔い改めようとしない連中のためのものである。こうした場面から醸し出されるのは、彼らこそは最悪の罪人であるという印象、すなわち彼らは神に忘れ去られた存在なのだという印象である（17節-18節）。

『神の母の苦悩巡礼』の配列はざっと以上のようなものである。したがってこの作品が乱脈極まりないとは言えないであろう。デテールについて言えば、この作品にはラテン系諸民族的な観点も、近代的要素も、支離滅裂あるいは不明瞭な部分も少なからずある。

作者もしくは作者たちは、諸々の罪を明確化あるいは分類することにも、苦悩のそれぞれを脚色したり、それぞれに濃淡をつけたりすることにも無頓着である。ただ確実に言えるのは、作者たちは当時の暮らしの中で頻発するそうした過失や犯罪を——すなわち眠っている最中に無用心にも子供を窒息死させてしまった母親、近所同士のゴシップ、共同生活を送る大家族の近親相姦関係、

隣接した畑を分捕るための境界石の移動…等々を——その目で見ているという
ことである。当然ながらそこにはまた、社会的な抗議の要素も看取できる。地
獄の亡者の中には主教や大主教、公や皇帝も、要するに自らに課された責務を
果たさずに日々怨恨の的となっている著名人たちもまた含まれているからであ
る。

注目すべきは、罰された諸々の罪が真の道德に関わるものではなく、外的な
行為に関わるものだという事である。問題になっているのは利己的な者や傲
慢な者、妬み深い者等々ではなく、世俗の法や教会の掟に照らして有罪な者た
ちなのである。だとすれば、『神の母の苦悩巡礼』はときに教会の法学者か決
疑論者⁽²⁾といった形式主義者の容喙を許してきたと考えないわけにはゆくま
い。

4. 文学的価値

『神の母の苦悩巡礼』の12世紀のテキストには、ギリシャ語とスラヴ語とを
問わず、ある種の節度が際立っている。紛う方なき劇的迫真力を生み出してい
るのは、この節度に他ならない。あらゆる霊的存在に擁護された神の母と個人
的当事者たる御子イエスとの論争の壮大きさに無関心でいられる人はいないだろ
う。御子イエスが人間に対して告げる苦情の数々は、聖金曜日にラテン諸国の
聖体礼儀において唱えられる悲痛なインプロペリア [Improperia/ローマカ
トリック教会や英国教会系教会で聖金曜日に教会で歌われる交唱のことだが、
キリストが民に話しかける言葉から始まり、キリストの慈悲と民の忘恩を想起
させる内容となっている] を想起させる。裁き手にして当事者でもある十字架
に掛けられたイエスと罪を犯した人間たちの間の訴訟は悲劇的である。なぜな
らそれはたんに地獄の亡者だけに関わる問題ではないからである。地獄の亡者
に続いてイワン・カラマーゾフが、というよりむしろドストエフスキーが、そ
して過失の有無に関わらず苦悩の淵に沈む人の誰もが、その訴訟をいったいど
のように行なってきたのかは、是非とも検討してみなければならない課題であ
る。

信頼に足るテキストの気宇広大な性格は、何世紀にもわたってそのテキストから生み出されてきた様々な異本と照らし合わせてみると、さらなる光芒を放つであろう。

5. 多種多様な増補および用途

パイピンによって検討された諸テキストによれば、17世紀においてすでに、「情けの薄い裁判官」や「正しきを罰し、悪しきを無罪放免とする不当な裁判官」、「人間を奴隷扱いし、法を無視して痛めつける公や地主たち」が、地獄の亡者たちの間で重要な位置を占めるようになってきている。そこではアクチュアリティと抑圧された庶民の涙ぐましい抗議が増幅されているものの、威厳は減じられている。

しかしあらゆる種類の際限ない増補が観察されるのは、とりわけフランコによって収集された18世紀のウクライナ語バージョンにおいてである。

そこでは地獄の亡者たちがこう叫んでいる——「おお、なんという不運！」。責苦の数々がそれぞれ明確に描かれ、一つ一つの場面も複雑化されている。地獄の亡者のある者たちは逆さ吊りにされ、またある者たちは三頭の猛獣に襲われて、心臓を引き抜かれるか、血管を引き千切られており、さらにはいくつかの大鍋まであって、そこでは硫黄と樹脂が煮えたぎっている。そして罪人リストには、あたかも忘却を恐れでもするかのように、ユダヤ人に古代ギリシャ人から始まって、ネロにネストリウス、ディオクレティアヌス、ヘロデス、デキウスと続き⁽³⁾、さらにキリストを笞刑に処した兵士たち、また占星術師に占い師、魔術師たち、また金銀の蓄財家たち、また重さをごまかした粉屋に寸法をごまかした測量士たち、また種子を盗んだ農夫に鉄を掠め取った鍛冶屋たち、糸あるいは布をごまかした織物職人たち、また蜜蜂の巣箱の盗人たちという具合に延々と列挙されてゆく。一方それに対し、独創性豊かな1897年のテキストはたとえば、内密に裁判官を買収した人々、日雇い労働者に取り決めた日給を支払わなかった守銭奴たち、自らの誓約を守らずに妻を捨てた夫たちに言及しないではいられなかった。

再検討され、増補改訂された『神の母の苦惱巡礼』にもまた諸々の風俗画が盛り込まれている。そこでは聖ミカエルが胡散臭い冗談を飛ばすことさえある。神の母が宗教的な義務を果たさなかった人々に課された責苦を目の当たりにし、驚きながらミカエルに、「これはどうしたことですか？ 健康でありながら教会へ行こうとしない人がこれほど多いとは！」と尋ねると、ミカエルは、「まったくでございます！ 彼らは頭に悪魔を一匹住まわせ、別な悪魔には尻に敷かれ、さらに別な悪魔には足を引っ張られているのです」と答えている。古いテキストの真摯さ深刻さもまた、想像力が逞し過ぎるか、あるいはまた同時代人を非難するのに性急な作者たちの犯した誤用や乱用によって危機に晒されているのである。

ロシアにおいて『神の母の苦惱巡礼』はまた19世紀始めまで、ピョートル大帝によってもたらされ、その後継者によって悪化させられたスキャンダラスにして高圧的な変革に対する一般民衆の抗議手段の一形式でもあった。

もしも1833年に大主教マーロフがさる旧教徒一派に抗して書いた文書を信じるなら、この旧教徒一派は自己流の『神の母の苦惱巡礼』を流布するつもりでいたらしい。それによれば、地獄の亡者とは、子供にラテン語のアルファベットを教えた父母であり、牛馬を轆で馬車に西歐式に繋いだ都会の人々であり、顎鬚に頬髭、口髭を剃り落とし、タバコの煙に陶然とした人々であり、農奴に過重な労働を強い、農奴から情け容赦なく賦課金を取り立て、農奴の息子らを兵役へと送り出した外国人執事であった。そこでは竜たちが悪い地主や、召使を苦しめるその妻たちを貪り食らっていた。このテキストの掉尾を飾っていたのは、次のような告示であった。すなわち、彼ら旧教徒の『神の母の苦惱巡礼』を頭上に掲げる人々は、その諸々の罪を免除されるが、彼ら旧教徒の『神の母の苦惱巡礼』を拒み、それを筆写する書き手に賃金を支払おうとしない人々は、齒軋り、嚴寒、業火といった永遠の苦しみへと委ねられることになろうという告示である。

もしもマーロフの言うことが本当なら、この旧教徒一派のテキストが由緒正しいアポクリファ『神の母の苦惱巡礼』の特定の場面をどれほど変質させてい

たかは、まさしく一目瞭然であろう。

地獄の亡者の諸々の苦しみは、大巡礼団の中で遍歴者や乞食、盲人などが単調な節回しで朗誦する宗教歌の作者たちの表現意欲を大いに掻き立てた。「ロシア思想 Русская мысль」1915年12月号の論文の一つでは、そうした盲人の一人が、子供に率いられた彼らの一団がある大きな村に到着したとき、その日は村の守護聖人の祝日だったため、彼らが聖金曜日の伝説、あるいは「神の母が諸々の苦悩をおとなわれた顛末」を歌った様子を語っている。

これらの苦悩はまた、ロシアではルウボークと呼ばれる、挿絵付きで彩色され、いくつかの宗教伝説が添えられた下世話な大衆読本にも主題を提供した⁽⁴⁾。

これらの苦悩は、12世紀以来、信徒教育のために教会内部の西壁の下方全体に、画家たちに推奨された図柄に従って描かれてきた最後の審判の一部をなすものである。その図柄とは、「聖なる秩序と修道院の秩序に服すすべての罪人のために、釜が煮えたぎっている。誹謗中傷家たちは舌を、道化師たちは臍を吊り下げられている。公や大貴族、裁判官たちの責苦は、眠りを知らない蛆虫たちである。高利貸しと吝嗇家の責苦は、溶かした金銀を彼らの咽喉へと流し込む悪魔たちである… 司祭の妻、尼僧、教会のパン焼き、教父、あるいは姉妹と不義密通を犯した者たちは、脊椎を火の上に吊り下げられている」というものである。

上述した図柄の最後のデテールのいくつかは、最後の審判の絵が本書で扱ってきた『神の母の苦悩巡礼』にどのように木霊しているのかをすっかり明らかにしてくれる。オストロフスキーの戯曲『雷雨』（1859年）を読めば、最後の審判の絵によって一般民衆の想像力に深々と刻印された印象というものの一つの姿に出会うことができよう⁽⁵⁾。

第2部第3章 訳注

- (1) ちなみに日本聖書学研究所編『聖書外典偽典6 新約外典I』（教文館、1998年第10版）所収の『パウロの黙示録』では、主イエスが地獄の苦悩の一時的中断を宣する場面が、

「…わたしが死人の中から復活した日には、苦痛の中にあるお前たちすべてに、一日一夜の安息を永遠に与えることにしよう」(310頁)となっていて、「復活した日」には「日曜日を指す」という注が施されている(458頁)。

- (2) 決疑論 казуистика とは、個々の事例に対し、本質的に疑義の余地はないが、必ずしも個別的日常現象に直接的に適用されるわけではない一般普遍的な宗教的原理を応用することによって、その場の行動に伴う倫理問題を解決する学問。ストア派やタルムード学者が先鞭をつけ、スコラ学者やイエズス会によって完成されたとされる。とくにイエズス会は決疑論の洗練に熱心で、あらゆる場合を想定した指南書まで作成している。決疑論は詭弁に墮すことが多かったので、日常的に決疑論者 казуист と言えば、ソフィスト софист 同様、白を黒言いくるめる詭弁家といった否定的ニュアンスが込められている。『カラマーゾフの兄弟』のスメルジャコフやイワンの大審問官は決疑論者のよき例と言えるだろう。
- (3) ネロはローマ皇帝(在位 54~68年)で、64年のローマ大火の際、放火の濡れ衣を着せてキリスト教徒を弾圧した。ネストリウスはコンスタンチノーブルの総主教(在位 428~31年)で、マリアを神の母とすることに反対し、431年のエフェソスの公会議で異端を宣告された。ディオクレティアヌスはローマ皇帝(在位 284~305年)で、ローマ古来の神々を信仰すべしとの立場から、303年突如キリスト教徒弾圧を開始し、パレスチナやエジプトで過激な弾圧を行なった。ヘロデスとは、ガリラヤの領主にしてユダヤの王(在位前 41~前 4年)であったヘロデス大王のことか、あるいはその子供で、父の死後ガリラヤとペレアの領主となり、妻サロメに唆されてヨハネを殺害したことで有名なヘロデス・アンティパスのどちらかであろうが、イエス・キリストとの関係から考えるなら後者のことであろうか。デキウスはローマ皇帝(在位 249~51年)で、ローマの伝統的神々を復興させるため、キリスト教徒を激しく弾圧した。
- (4) ルッポーク лубок とはそもそも樹皮を素材とした民衆版画のことだが、後にはこの版画を挿絵とした大衆文学誌をも意味するようになった。そこで扱われる題材は聖者伝や宗教説話、神話から、歴史や算数、文学、世態風俗、風刺と幅広く、民衆の啓蒙に大きな役割を果たした。また版画の手法は 20 世紀初頭のアバンギャルド芸術に影響を与えた。
- (5) オストロフスキー (Александр Николаевич Островский, 1823-86) はチーフととともにロシア 19 世紀を代表する劇作家。ヴォルガ河畔の小都市を舞台とし、ついにはヴォルガに身を投げる若妻の悲劇を描いた『雷雨 Гроза』(1859年)は、数ある作品の中でも最高傑作とされる。作品中とくに最後の審判の影響を感じさせるのは、家庭生活に恵まれないヒロインのカテリーナと気の触れた老婦人であろう。たとえばカテリーナが夫以外の男と逢引を夢見る場面では、気の触れた老婦人が、カテリーナの不幸を予言する

かのように、最後には誰もが地獄の業火に焼かれると語ると、それを聞いたカテリーナは夫以外の男との逢瀬などという罪な考えを持ったまま最後の審判を受けることを恐れているし（第1幕8～9景）、またカテリーナが逢瀬を後悔する場面では、気の触れた老婦人の口の端に神罰と地獄の業火のことがのぼった途端、彼女は罪の意識と後悔の念に耐え切れなくなって、自らの罪を告白するのである（第4幕6景）。

付録

『生神女の苦悩巡礼』には中田甫氏による翻訳がある（「文学としてのロシア・アポクリフの輪郭並びに“聖母の地獄めぐり”試訳」、「国立大学ハルビン学院論叢」第3輯、65-95頁所収。ただし翻訳部分は88-95頁）。この試訳を現代語訳し、講談社『現代の知的遺産51 ドストエフスキー』（326-335頁）に再録した内村剛介氏によれば、この試訳は「ずいぶん古くそしていまも新しい『本邦初訳』である」（同書「まえがき」2頁）とのことである。

それはさておき、手元には『生神女の苦悩巡礼』の現代ロシア語訳があり、中田訳よりも分量が多くなっているのので、それも参考のために、とくに先に訳出したパスカル訳との比較のために、ここに翻訳しておこう。底本として『古代ロシア文学記念碑 17世紀 Памятники литературы древней Руси. 17 век. (M., «Художественная литература», 1980.)』166~183頁を使用する（ここでは、1862年フィピンによって「古代ロシア文学の記念碑」第3号に発表された、後年の写本の一つがテキストとして用いられている→ Памятники старинной русской литературы, изд. Гр. Кушелев-Безбородко, ред. Н.Костмаров, вып. 3, СПб., 1862, стр.118-124）。あまりに意味が不鮮明な部分には下線を施し、どちらにしてもパスカルの訳ほど理路整然としているようには見えないが、とにかく『古代ルーシのアポクリファ。テキストと研究 Апокрифы древней Руси. Тексты и исследования (M., «Наука», 1997)』75~81頁を参照し、その訳も [] 内に並置することとする（ここでは、1863年チホヌラーヴォフによって「聖書外典・偽典の記念碑」第2号に発表された、聖三位一体セルギエフ大修道院所蔵の12世紀の羊皮紙写本がテキストとして用いられている→ Памятники отреченной русской литературы, собраны и изданы Н. Тихонравым. Т.2. М., 1863, стр. 23-30)。ちなみに制作年代に大きな開きがあると思われる両テキストには、当然ながら大小様々な異同があるが、それはここ

では問わない。

なお脚注は訳者による注である。

〈01〉 聖なる生神女はオリーブ山で我らが主なる神に、父と子と聖霊の名において大天使ミカエルが地上に降り立ち、天上と地上双方の苦しみについて語り聞かせてくれますように、と祈ろうとしました。この祈りの言葉が告げ知らされると、大天使ミカエルは天から降りてきました。四百の天使が一緒でしたが、そのうちの百は東の方から、百は西の方から、百は南の方から、百は北の方からやってきたのでした。ミカエルと天使たちは慈悲深い生神女に口づけし、それから大天使は言いました——「お喜びください、父の補完者よ、お喜びください、子の住処よ、お喜びください、聖霊の誉れよ、お喜びください、キリストの…確立者よ、お喜びください、ダヴィデによって預言された人よ、お喜びください、聖なる礼拝の的よ、お喜びください、預言者たちによって告示された人よ、お喜びください、誰よりも高く神の玉座の傍らに立つ人よ」。

〈02〉 慈悲深い生神女は大天使ミカエルに答えました——「喜びなさい、司令官よ、第一の戦士よ、見えざる父の従者にして光照らす者よ、喜びなさい、ミカエルよ、軍団の長よ、聖霊の命に従う者よ。喜びなさい、司令官よ、セラフイムたちの誉れよ、喜びなさい、迫害者を打ち負かし、主の玉座の前に堂々と立つ司令官ミカエルよ。喜びなさい、ミカエルよ、不断の光よ、喜びなさい、司令官よ、太古の昔よりラッパを吹き鳴らし、死者たちを呼び覚まそうとしてきた第一の戦士よ。喜びなさい、ミカエルよ、天の全軍団に君臨し、全天使によって神の玉座にも届けとばかりに賞賛される第一の天使よ」。

〈03〉 生神女は人間たちの魂が苦しむ様子を見たいと思われ、司令官ミカエルに言いました——「この地上のすべてについて教えてください」。ミカエルは答えました——「慈悲深い生神女よ、仰せの通り、すべてをあなたにお話しいたしましょう」。聖なる生神女は尋ねました——「キリスト教徒はどれだけの、またどのような苦悩にあえいでいるのでしょうか?」。司令官は答えました——「とてもすべての苦悩を数え上げることなどできません」。慈悲深い生神女

は願われました——「天上と地上にはどのような苦悩があるのかを教えてください。」。

〈04〉 司令官が南の方からきた天使たちに姿を現すようにと命じると、地獄が大きく口を開け、生神女は地獄で苦しむ人々を目の当たりにされました。地獄には数多の男女がいて、泣き叫んでいました。慈悲深い生神女は司令官に尋ねました——「これは何者ですか?」。司令官は答えました——「これは父と子と聖霊を信ぜず、神を忘れ、太陽に月、大地に水、獣に爬虫類、両生類といった、神が我々の労働のために創造されたものを神と呼び、信じた者たちです。彼らはそうしたものをすべて石で作り上げ、そうして作り上げたトロヤン、ホルス、ヴェレス、ペルウンを神へと祀り上げたのです。彼らは性悪な悪魔にとりつかれ、それらを信じ、今に至るまで悪の暗闇に住んでいるがゆえに、ここでこうして苦しんでいるのです」。

〈05〉 生神女は別な場所で漆黒の闇を目にし、尋ねました——「この漆黒の闇は何ですか? そこには誰が住んでいるのですか?」。司令官は答えました——「あそこには多くの人々がおります」。聖なる生神女は言いました——「闇よ、晴れるがよい、あそこでの苦悩が私にも見えるように」。苦悩を見張っていた天使たちは答えました——「7つの太陽よりも明るいあなたさまの慈悲深いご息子が現れるまでは、あの者たちに光を見せてはならぬと命じられております」。聖なる生神女は悲しみにくれ、天使の方へと目を上げ、見えざる父の玉座を仰いで言いました——「父と子と聖霊の名においてこの闇は晴れるべし、あそこの苦悩が私にも見えるように」。すると闇は晴れ渡り、7つの天が現れると、そこには男女大勢の人々がいて、激しい絶叫と泣き声が聞こえてきました。至聖生神女は、彼らの姿を目にすると、涙ながらに叫びました——「いったい何をしでかしたのですか、不幸な者たちよ、呪われた者たちよ、どうしてそこへ落ち込んでしまったのですか、破廉恥な者たちよ?」。しかし声一つ、答え一つ、聞こえてはきませんでした。見張りの天使たちは言いました——「どうして答えないのでですか?」。すると苦しんでいる者たちは言いました——「ああ、慈悲深い生神女さま、我らはかつて一度も光を見たことがなく、上方

を見上げることもできないのです」。聖なる生神女は彼らをご覧になると、激しく泣き出されました。苦しんでいる人々は、そんな生神女を見て言いました——「どうして私たちのところへおいでになったのですか、聖なる生神女さま？ あなたの慈悲深い御子は地上に降臨されたとき、私たちに何一つお尋ねになりませんでした。族長アブラハムさまも、預言者モーセさまも、洗礼者ヨハネさまも、神の寵児たる使徒パウロさまもまた、何一つお尋ねにはなりませんでした。それなのに、至聖生神女さま、我らが庇護者であり、キリスト教徒の盾であり、我らのために祈ってくださるそんなあなたが、どうして憐れな私たちのもとへおいでになったのですか？」。そのとき聖なる生神女は司令官ミカエルに尋ねました——「この者たちの罪は何ですか？」。ミカエルは答えました——「これは、父と子と聖霊を、そして聖なる生神女さま、あなたを信じなかった者たちです。この者たちはあなたの御名を、そして我らがイエス・キリストがあなたからお生まれになり、受肉され、洗礼によって地上を祓い清めてくれたことを教え広めようとしなかったのです。そのためにここでこうして苦しんでいるのです」。聖なる生神女は再び泣き出され、苦しんでいる者たちに尋ねました——「お前たちはどうして誘惑に負けたのですか？ まさかお前たちは、生きとし生けるものすべてが私の名前を崇めていることを知らないのですか？」。

〈06〉 聖なる生神女はそう言うと、再び彼らを闇で閉じ隠してしまわれました。司令官が生神女に尋ねました——「慈悲深い生神女さま、今度はどちらへ参りましょうか？ 南の方でしょうか、北の方でしょうか？」。慈悲深い生神女は答えました——「南の方へと参りましょう」。するとケルビムたち、セラフィムたち、四百の天使たちは身を翻し、生神女を火の川が流れる南の方へと案内しました。そこには数多の男女がいて、その誰もが河に浸かっていた。腰まで浸かっている者もあれば、腋の下まで浸かっている者もあり、首まで浸かっている者もあれば、頭まで浸かっている者もいました。

〈07〉 それをご覧になった聖なる生神女は、大きな声で泣き出され、司令官に尋ねました——「腰まで火に浸かっているのは何者ですか？」。司令官は答え

ました——「これは父母から呪いを受けた者たちで、それゆえにここで呪われた者として苦しんでいるのです」。生神女は再び尋ねました——「では、腋の下まで火に浸かっているのは何者ですか?」。司令官は答えました——「これは近しい教父たちですが、お互いに敵対し合い、またある者は放蕩に身をやつしたために、ここでこうして苦しんでいるのです」。至聖生神女は尋ねました——「首まで燃える炎に沈んでいるのは何者ですか?」。大天使は答えました——「これは人肉を食した者たちです。人肉を食したがゆえにここでこうして苦しんでいるのです」。聖なる生神女は尋ねました——「頭まで火に浸かっているのは何者ですか?」。司令官は答えました——「これは、生神女さま、聖なる十字架を手にしながら、聖なる十字架の力にかけて偽りの誓いを立てた者たちです。天使たちでさえ聖なる十字架の前では身を振るわせ、恐れ戦きながら十字架に跪拝するものなのです。それをこの者たちは、どんな苦悩が待ち受けているかも知らずに、十字架を手にし、十字架にかけて誓おうとするがゆえに、ここでこうして苦しんでいるのです」。

〈08〉 聖なる生神女は、両足を吊るされ、蛆虫に蝕まれている男を目にすると、天使に尋ねました——「これは何者ですか? この男はどんな罪を犯したのですか?」。司令官は答えました——「これは金銀を元手に利益を貪った男で、それゆえに永遠の苦しみを受けているのです」。

〈09〉 生神女は齒を吊るされた女を目にされました。女の口からは様々な蛇が這い出てきて、女を食べていました。それをご覧になった至聖生神女は天使に尋ねました——「この女は何者ですか? どんな罪を犯したのですか?」。司令官は答えて言いました——「この女は、生神女さま、親類や隣近所の人のところへ出入りし、彼らの噂を聞き込み、彼らと争い、彼らに対する誹謗中傷を撒き散らしたのです。それゆえにこの女は苦しんでいるのです」。聖なる生神女は言いました——「そんな人間は生まれてこない方がよかったですでしょうに」。ミカエルは言いました——「聖なる生神女さま、あなたさまはまだ大きな苦しみをご覧になってはおられません」。聖なる生神女は司令官に言いました——「ではこれから出かけて、ありとあらゆる苦しみを見て回りましょう」。ミ

カエルは言いました——「ではどちらへ参りましょうか、慈悲深い生神女さま?」。聖なる生神女は答えました——「北の方へと参りましょう」。こうしてケルビムたち、セラフィムたち、それに四百の天使たちは身を翻すと、慈悲深い生神女を北の方へと連れて行きました。そこでは火の雲が広がり、その真ん中には灼熱の長椅子があつて、その長椅子の上には数多の男女が横たわっていました。聖なる生神女はその光景を目にされると、溜息をつかれ、司令官に言いました——「これは何者ですか? どんな罪を犯したのですか?」。司令官は言いました——「これは、聖なる日曜日の早朝祈祷に起きて参加しようとせず、怠けて死人のように寝そべっている者たちで、それゆえに苦しんでいるのです」。聖なる生神女は言いました——「けれどももしも朝に起床することができないのだとしたら、その者たちはどんな罪を犯したことになるのですか?」。ミカエルが答えました——「お聞きください、聖なる生神女さま、もしも誰かの家が四方から燃え上がり、周りをすっかり火に包まれてしまったのに、起床することができずに焼け死んでしまうとすれば、その場合はその者に罪はないのです」。

〈10〉 別な場所で火まみれのテーブルとその上で燃え上がる数多の男女を目にされたとき、聖なる生神女は司令官に尋ねました——…「これは、司祭たちを敬わず、司祭たちが神の教会からやってきたときに、彼らを起立して出迎えようとはしない者たちで、それゆえに苦しんでいるのです」。

〈11〉 聖なる生神女は鉄の大枝小枝をつけた鉄の木を目にされました。木の頂には鉄の鉤がいくつもついていて、その鉤には数多の男女が舌を吊るされていました。聖なる生神女は、この様子を目にすると、ミカエルに尋ねました——「これは何者ですか? どんな罪を犯したのですか?」。司令官は答えました——「これは、誹謗中傷の徒であり、兄弟同士や夫婦の離別を仲介した者たちです」。続けてミカエルは言いました——「お聞きください、至聖生神女さま、あの者たちのことをお話しいたしますから。もしも誰かが洗礼を受けようとか、自らの罪を懺悔しようとする、この誹謗中傷家どもはそうした者たちを翻意させ、救いへと教え導くことをしなかったのです。それゆえにあの者た

ちは永遠に苦しんでいるのです」。

〈12〉 別な場所で聖なる生神女は、四方から両手両足の爪の先端を吊るされている男を目にされました。だらだらと血を流し、燃え上がる炎で舌を縛り上げられたその男は、溜息をつくことも、「主よ、我を憐れみたまえ」と口にすることもできませんでした。至聖生神女は、その男をご覧になると、「主よ、憐れみたまえ」と三度唱え、それからお祈りをあげられました。生神女のもとへ、苦しみを司る天使が近づいてきました。その男の舌を自由にしてやるためでした。聖なる生神女は天使に尋ねました——「かくも苦しんでいるこの憐れな男は何者ですか?」。天使は答えました——「これは儉約家にして教会へ仕える者ですが、この男は神の意志を実現しようとはせず、教会の什器や礼拝用具を売り飛ばし、『教会で働く者は教会を生活の資とする』と嘯っていたのです。それゆえにこの男はここで苦しんでいるのです」。聖なる生神女は言いました——「それは因果応報というものです」。天使は再びその男の舌を縛ってしまいました。

〈13〉 司令官は言いました——「参りましょう、生神女さま。司祭たちが苦しんでいる場所をお見せいたしましょう」。生神女は爪の先端を吊るされた司祭たちをご覧になられました。彼らの頭からは火が立ち上り、彼らを焼き焦がしていました。至聖生神女は、この様子を目にすると、尋ねました——「これは何者ですか? どんな罪を犯したのですか?」。ミカエルが答えました——「これは、聖体礼儀を執り行なっていた者たちですが、彼らは神の玉座の前に立つとき、自らをそれに値する人間とみなしていたのです。彼らは聖体礼儀第一部を執り行なうとき、聖パンを大切にせず、聖パンの欠片をさながら神の星々のように地面へ落としたのです。そのとき恐ろしき玉座は揺れ動き、神の台座は震え出したのです。それゆえに彼らは今このように苦しんでいるのです」。

〈14〉 それから聖なる生神女は一人の男と翼を持った三頭の蛇を一匹ご覧になりました。蛇の三頭のうちの一つは男の両目に、もう一つは男の唇に向けられていました。司令官が言いました——「この憐れな男は蛇のせいで休息できないのです」。司令官は続けて言いました——「この男は、生神女さま、聖書は

もちろん、福音書も読んだのですが、自分ではその教えに従おうとしなかったのです。人々に教えを垂れておきながら、自分では神の意志を実現しようとはせず、不義密通と無法の暮らしをしていたのです」。

〈15〉 主の軍団を率いる司令官は言いました——「先へ参りましょう、至聖生神女さま。天使や使徒の位階にある者たちが苦しんでいる場所をお見せいたしましょう」。聖なる生神女は、天使や使徒の位階にある者たちが燃え上がる炎に包まれ、倦むことを知らない蛆虫に噛まれているのをご覧になると、こう尋ねました——「これは何者ですか?」。ミカエルが答えました——「これは天使と使徒の姿をした者たちで、地上では総主教とか主教といった栄えある名前で呼ばれ、『聖なる神父さま、祝福したまえ』と声をかけられていました。しかし天使と使徒の姿をとるために必要なことを何一つとしてしなかったがゆえに、天上では聖人と呼ばれることのなかった者たちです。それゆえに彼らはここでこのように苦しんでいるのです」。

〈16〉 至聖生神女は爪を吊るされた女たちを目になさいました。女たちの口からは炎が噴き出し、女たちを焼き焦がす一方、その炎の中から蛇が一匹這い出してきて、女たちに絡みついていた。女たちは大声で叫んでいました——「我らを憐れみたまえ。我らだけが他の誰よりも辛い苦しみに会っているのですから」。聖なる生神女は泣き出され、尋ねました——「この女たちはどんな罪を犯したのですか?」。司令官が答えました——「これは司祭の妻たちです。彼女らは司祭たる夫を敬わず、夫の死後に再婚したために、ここでこうして苦しんでいるのです」。

〈17〉 生神女は、火の中に横たわり、様々な蛇に貪られている別の女たちをご覧になると、尋ねました——「この女たちはどんな罪を犯したのですか?」。ミカエルは答えました——「これは修道院の尼僧たちです。この尼僧たちは肉体的放恣に耽ったがゆえに、ここでこうして苦しんでいるのです」。

〈18〉 司令官は言いました——「先へ参りましょう、至聖生神女さま。数多の罪人が苦しんでいる場所をお見せいたしましょう」。聖なる生神女は火の川をご覧になられました。全大地を呑み込んだその川にはまるで血が流れているか

のようで、その中には数多の罪人がおりました。生神女は、この様子をご覧になると、涙を流して言いました——「この女たちはどんな罪を犯したのですか?」。司令官は答えました——「これは放蕩者に姦通者、泥棒、身近な人々が話していることをこっそり盗み聞きする者、女衒、誹謗中傷に明け暮れる者、他人の畑を刈り取り、他人の果実を摘み取った者、他人の働きで糊口を凌ぎ、夫婦を別れさせようとする者、酔っ払い、情薄き公、神の意志を実現しようとしなかった主教に総主教に皇帝、蓄財に耽る守銭奴、無法者たちです」。至聖生神女は、このことを耳にされると泣き出し、言いました——「ああ、なんと憐れな罪人たちよ!」。そして生神女は司令官にこう付け加えました——「これらの罪人たちは生まれてこない方がよかったですように!」。

<19> ミカエルは生神女に尋ねました——「なにゆえにお泣きになるのですか、聖なる生神女さま? あなたはこれまで本当に大きな苦しみをご覧になったことがないのですか?」。至聖生神女は答えました——「私を案内してください。あらゆる苦しみを見ることができるよう」。ミカエルが生神女に言いました——「お望みのところへ参りましょう、慈悲深い生神女さま。東の方へ参りましょうか、それとも西の方へ参りましょうか? 右の方にある天国へ参りましょうか、それとも大きな苦しみが待つ左の方へ参りましょうか?」。至聖生神女は答えました——「左の方へと参りましょう」。ケルビムたちとセラフィムたちと四百の天使たちは、至聖生神女の言葉を聞くと、身を翻し、生神女を東から左の方へと連れてゆきました。行った先の川はその周囲を深い闇に閉ざされていて、川には数多の男女が横たわっていました。あたりの水は釜の中の水のようにぐつぐつと煮えたぎっており、さながら海の波が罪人たちの頭上で砕け散るかのようで、波が高まると、罪人たちは千ローコチ [約 500 m] の谷底へと叩き込まれ、「正しき裁き手たる神よ、我らを憐れみたまえ」と言うことさえできないのでした。罪人たちはひっきりなしに蛆虫に齧られていて、齒軋りの音が聞こえていました。罪人たちを見張っていた天使たちは、至聖生神女の姿を見ると、異口同音に叫びました——「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、聖なる神は。そしてあなた、生神女よ、我らはあなたとあなたから生

まれた神の御子を祝福いたします。我らは太古の昔より光を目にしたことなどなかったのですが、今は、生神女さま、あなたのおかげで光を目にしているからです。天使たちはもう一度異口同音に叫びました——「お喜びください、慈悲深い生神女さま、お喜びください、永遠の光の輝きよ、お喜びください、全世界のために生神女に祈る聖なる司令官ミカエルよ、我らとて、苦しむ罪人たちを見ては、深く悲しんでいるのです」。

〈20〉至聖生神女は、天使たちが罪人たちのことで心痛め、悲しんでいるのをご覧になると、激しく泣き出されました。すると罪人たちはみなして一斉に叫びました——「あなた方がこの闇の世界においでになり、我らと我らの苦しみを目にされたのはありがたいことです。至聖生神女よ、どうか司令官と一緒に祈りください」。罪人たちの泣き声と叫び声を耳にされた生神女は、自らも泣き出され、嘆き悲しんで言いました——「主よ、我らを憐れみたまえ」。それは、生神女が祈り終えられたとき、川の嵐と火の波が静まりかえるようになるためでした。すると罪人たちがからしの種のように姿を現しました。聖なる生神女は、この様子をご覧になると泣き出され、尋ねました——「この川とこの波はいったい何ですか?」。司令官は答えました——「この川はこれすべてタールであり、この波はこれすべて火なのですが、そこで苦しんでいるのは、神の御子、我らが主なるイエス・キリストを迫害したユダヤ人たちです。ここにいるのは皆、父と子と聖霊の名において洗礼を受け、キリスト教徒を名乗りながらも、悪魔を信仰し、神と聖なる洗礼を蔑ろにした者たちです。ここにいるのは、聖なる洗礼の後で自らの教父母、あるいは実の母親か娘とふしだらな関係に陥った者たちであり、人々を毒殺したり、武器で人々を殺したり、自分の子供を窒息死させた者たちで、そうした行いのゆえにここでこうして苦しんでいるのです」。聖なる生神女は言いました——「それは因果応報というものです!」。すると罪人たちは再び荒れ狂う川と火の波に呑み込まれ、闇にすっぽりと覆い隠されてしまったのでした。ミカエルは生神女に言いました——「いったんこの闇に落ち込んでしまえば、神はその者のことなど思い出しはしないでしょう」。至聖生神女は言いました——「おお、この火の消えることのない

い炎に包まれた罪人たちのなんと憐れなことか！」。

〈21〉司令官は生神女に言いました——「先へ参りましょう、至聖生神女さま。キリスト教徒が苦しんでいる火の湖をご覧にいれましょう」。生神女は目を凝らし、彼らの号泣と絶叫を耳にされましたが、罪人自身の姿は見えなかったので、尋ねました——「ここにいる者たちはどんな罪を犯したのですか？」。ミカエルは言いました——「これは、洗礼を受け、十字架のことを覚えていながら、悪魔の所業に身を委ね、懺悔する間がなかった者たちで、それゆえにここでこうして苦しんでいるのです」。

〈22〉至聖生神女は司令官に言われました——「あなたに一つ、たつてのお願いがあります。どうか私が火の湖に入り、キリスト教徒たちとともに苦しむことができるようにしてください。なんとなればあの者たちは我が御子の息子、娘と呼ばれていたのですから」。司令官は言いました——「天国においでください」。至聖生神女は答えました——「お願いですから、罪人たちのために祈ることができるように、どうか七つの天の軍団と天使の全軍を召集してください。どうか主なる神が我らの声をお聞き届けになり、罪人たちに御慈悲をお施してくださいますように」。

〈23〉「主なる神は生きておられ、その名は偉大であられる。我らは昼に七度、夜に七度主を礼拝し、その都度主を褒め称え、罪人たちのために乞い願ってもいるのですが、生神女さま、それでも主は我らの声を少しもお聞き届けにならないのです」。至聖生神女は言いました——「お願いですから、どうか天使の軍団に私を天の高みへと運び、見えざる父の御前に立たせてくれるよう命じてください」。

〈24〉司令官が命令すると、ケルビムたちとセラフィムたちが現れ、慈悲深い生神女を天の高みへと運び上げ、見えざる父の御前、その玉座の傍らに立たせました。生神女は慈悲深い我が御子に向かって両手をかざし、言いました——「主よ、罪人たちを憐れみたまえ。この目で見ましたが、あの者どもの苦悩は見るに忍びません。どうか私にもあのキリスト教徒とともに苦しませてください」。すると一つの声が轟きわたり、生神女に告げました——「どうしてあ

の者たちを憐れむことなどできようか？ 我が御子の掌に打ち込まれた釘が見えるというのに、あの者たちを憐れむなどできない相談だ」。生神女は言いました——「主よ、私は不信心なユダヤ人のためにお願いしているのではありません。キリスト教徒たちのためにあなたの御慈悲を乞い願っているのです。一つの声が轟きわたり、告げました——「あの者たちが我が兄弟たちを憐れまなかつたことは分かっている。だからあの者たちを憐れむなどできない相談だ」。至聖生神女は再び言いました——「主よ、罪人たちを憐れみたまえ、主よ、あなたの御手によって創られた者たちを憐れみたまえ。なんとなれば彼らは地上のいたるところであなたの名前を唱え、どんな苦しみの中にあっても、この地上のどんな場所にいても、『主なる至聖生神女よ、我らを助けたまえ』と口にしてしているのですから。そして人は生まれるや、『聖なる生神女よ、我を助けたまえ』と言うのですから」。主は生神女に言いました——「よく聞くがいい、主なる至聖生神女よ、あなたの名に祈らぬ者などいないのであってみれば、天上であれ、地上であれ、私もまたそうした者たちを見捨てたりはしない」。

〈25〉 至聖生神女は言いました——「預言者モーセはどこにいるのですか？ 預言者という預言者たち、それに一度として罪など犯したことの無い教父たちよ、あなた方はどこにいるのですか？ 神の寵児パウロはどこにいるのですか？ キリスト教の誉れたる復活は¹どこにあるのですか？ アダムとイヴを呪詛から救った聖なる十字架の力はどこにあるのですか？」。司令官ミカエルと全天使は言いました——「主よ、罪人たちを憐れみたまえ」。モーセは大声で叫び、言いました——「主よ、憐れみたまえ。なんとなればこの私が彼らにあなたの律法を授けたのですから」。ヨハネは叫んで言いました——「主よ、憐れ

¹ 「復活」と訳したのは воскресение だが、パスカルの訳と説明に従って「日曜日 воскресенья」と訳すべきなのかもしれない。『古代ルーシのアポクリファ。テキストと研究』には次のような注がある——「どうしてここで神と人間を取りもつキリスト教群像の一人として Воскресенья が言及されているのかは不明。確かに、Воскресенья (неделя) を擬人化する中世の風習との連想が掻き立てられないわけでもない。この風習は反キリスト教的な教説の中で繰り返し非難されている」。

みたまえ。なんとなればこの私が彼らにあなたの福音書を教え諭したのですから」。パウロは大声で叫び、言いました——「主なる神よ、憐れみたまえ。なんとなればこの私が教会という教会にあなたの書簡を伝えたのですから」。主なる神は言いました——「みなの方、よく聞くがいい。もしも裁きが我が福音書に従って、あるいは我が律法に従って、あるいはヨハネが高らかに宣した福音書の教えに従って、あるいはパウロがもたらした書簡に従って行なわれるのであれば、その裁きは受け入れられるであろう。天使たちがそのためにできるのは、ただ『主よ、憐れみたまえ。我らは正しき者なり』と嘆願することのみである [そのために天使は、『多くの罪人を憐れみたまえ。主よ、あなたは正しい』と言うことができるだけだ]」。至聖生神女は言いました——「主よ、罪人たちに憐れみたまえ。なんとなれば彼らは福音書を受け入れ、あなたの律法を守ってきたのですから」。主は生神女に言いました——「至聖生神女よ、よく聞くがよい。もしも彼らのうちの誰かが悪をなしながら、自らが囚われの身であることを懺悔しなかったとしたら——あなたは、彼らはあなたの律法を学び覚えたと確言しているけれど——、そして再び悪をなしながら、なした悪の報いを受けなかったとしたら、いったい私に何が言えようか。すでに言われているではないか、彼らはやがてその悪意に応じた報いを受けるであろうと [もしも罪人たちの誰かが罪を犯しながら、たとえそれが、あなたが庇い立てするように、故意ではなかったにせよ、懺悔しなかったのなら、またあなたの律法を習い覚えた人々が、再び罪を犯したとすれば、はたして彼らは罪を犯さなかったと言えるだろうか。私は言おう、すでに言われてしまったことが実現されるようにと。すなわち、『主は彼らにその罪ゆえに復讐するであろう』と]」。こう告げる主の御言葉を耳にした聖人たちの誰ひとり、何も答えることはできませんでした。

〈26〉 至聖生神女は、聖人たちの誰ひとり何も言わず、一方主が聖人たちの言葉に耳をお貸しになるところか、罪人たちからその恩寵を遠ざけようとしている様子をご覧になると、こう言いました——「私に『お喜びください、あなたさまは誰よりも早く父の御言葉を聞かれたのですし、父なる神は今や罪人た

ちのことなど気に留めておられないのです』と告げ知らせてくれた司令官ガブリエルはどこにいますか？ 全地上でただ一人その頭上に町を支え持つかの巨人はどこにいますか？ しかし大地は人々の破廉恥な行ないのせいで割れ砕けてしまったので [私に『お喜びください、万世の以前から父の声を聞いてきたことを』と告げ知らせてくれた司令官ガブリエルはどこにいますか？ 今や主は罪人たちに御慈悲をお施しく下さいませ。その円蓋に町を戴いていたあの巨人はどこにいますか？ 地上はいたるところ人間の悪行によってすっかり汚染されてしまったので]、その後主なる神は我が子をお遣わしになり、大地の実りを確立してくださいました。また玉座に仕える人々はどこにいますか？ 神学者ヨハネはどこにいますか？ どうしてあなた方は我らとともにキリスト教徒の罪人たちのために主に祈ってくれないのですか？ まさかあなた方には、私が罪人たちのために涙を流しているのが見えないのですか？ おいでください、全天使よ、天上のすべての住人よ。おいでください、主によって認められたあらゆる義人の方々よ。あなた方は罪人のために祈ることを許されているのですから。おいでください、ミカエルよ。あなたは神の玉座の傍らに立つ霊的存在の第一人者なのですから。おいでになって、全員に命じてください、見えざる父の足もとへ身を投げ出しましょうと。そして、父が我らの願いをお聞き届けになり、罪人たちに御慈悲を垂れたまうまで、天上に昇らないようにしようではありませんか」。するとミカエルが玉座の前に平伏し、彼とともに天上の全住人も、あらゆる位階の霊的な存在も平伏したのでした。主は聖人たちの祈りをご覧になると、唯一無二の御子のために御慈悲を垂れられ、言いました——「降りるがよい、我が最愛の息子よ。聖人たちの祈りをしかと見届け、罪人たちに顔を見せてやるがよい」。

〈27〉 主がその見えざる玉座から降りられると、闇の中に座していた者たちはその姿を目にし、異口同音に大声で叫び、言いました——「我らを憐れみたまえ、神の御子よ、我らを憐れみたまえ、万世の王よ！」。主は言いました——「みなの方、聞くがよい。私は天国を築き、自分の姿に似せて人間を創り、人間を天国の主人とし、人間に永遠の生命を授けた。しかるに人間は我が命に

背き、自らの欲するままに罪を犯し、死にその身を委ねてしまった。私は、悪魔が我が手になる被造物を苦しめるのを目にしたくなかったので、地上に降り立ち、乙女の肉体に宿り、人間を奴隷状態と原初の呪いから解き放つために十字架へと上ったのだ。私は水を頼んだのだが、与えられたのは酢を混ぜた胆汁であった。我が手が人間を創り上げたのに、人間は私を棺桶の中に横たえたのだ。そしてまた私が地獄へ降り、敵を倒し、我が選良たちを復活させ、ヨルダン川を祝福したのは、お前たちの原初の呪いを贖うためだったというのに、お前たちは自らの罪の懺悔を蔑ろにしたのだ。お前たちはただ舌先三寸でキリスト教徒と名乗るだけで、私の戒律を守ろうとはしていない。それゆえにお前たちは尽きることのない火の中にいるのであり、私はお前たちに慈悲を垂れようとはしないのだ。だが今日の日、私は、私をお前たちのもとへ遣わした我が父の御慈悲のゆえに、お前たちのことで多くの涙を流した我が母の祈りのゆえに、司令官ミカエルの誓いのゆえに、お前たちのために大いに心痛めた数多の我が殉教者のゆえに、日夜苦しんでいるお前たちに聖木曜日から三位一体祭の日まで平安を与えることにしよう。父と子と聖霊を祝福するがよい」。全員が答えました——「あなたさまの御慈悲に栄えあらんことを」。

〈28〉 父と子と聖霊に、今日もいつの日も、そして未来永劫いついつまでも栄えあらんことを。アーメン。